

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.264

2015年5月

平成27年度入学式を举行



目次

●ニュース

| | |
|---|----|
| 平成27年度入学式を挙 | 3 |
| イノベーションに最も適した国を目指す名古屋大学シンポジウムを開催 | 12 |
| 松尾総長就任式を挙 | 13 |
| 名古屋大学オープンレクチャー2015を開催 | 13 |
| 新 CALE 棟茶室整備寄附目録を受領 | 14 |
| 平成27年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決まる | 14 |
| 平成26年度実施大学機関別認証評価において本学が「大学評価基準を満たしている」と認定される | 15 |

●知の先端

| | |
|--------------------|----|
| ナノバイオデバイスが拓く健康長寿社会 | 16 |
| 馬場 嘉信 (大学院工学研究科教授) | |

●知の未来へ

| | |
|---------------------|----|
| 構内遺跡調査の成果と意義 | 18 |
| 梶原 義実 (大学院文学研究科准教授) | |

●部局ニュース

| | |
|------------------------------------|----|
| 私法統一国際協会 (ユニドロフ) と協力協定を締結 | 19 |
| 持続的共発展教育研究センター公開国際シンポジウムを開催 | 19 |
| 「海藻絵はがきを作ってみよう」を開催 | 20 |
| 特別展「2014年ノーベル物理学賞－青色 LED の開発研究」を開催 | 20 |
| ICCAE 第15回オープンフォーラムを開催 | 21 |
| 素粒子宇宙起源研究機構講演会を開催 | 21 |
| 平成26年度動物慰霊祭を挙 | 22 |
| 「ふみよむゆふべ」を開催 | 22 |
| ミクロの探検隊®を開催 | 22 |

●新名誉教授のことば

| | |
|--|----|
| | 23 |
|--|----|

●名大を表敬訪問された方々

| | |
|--|----|
| | 27 |
|--|----|

●新たに締結した学術交流協定

| | |
|--|----|
| | 27 |
|--|----|

●構成員を対象とした研修

| | |
|--|----|
| | 28 |
|--|----|

●新任役員等の紹介

| | |
|--|----|
| | 29 |
|--|----|

●新任部局長等の紹介

| | |
|--|----|
| | 31 |
|--|----|

●資 料

| | |
|--|----|
| | 35 |
|--|----|

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成27年3月16日～4月15日

| | |
|--|----|
| | 38 |
|--|----|

● INFORMATION

| | |
|----------------------------|----|
| 第56回名大祭を6月4日(木)～6月7日(日)に開催 | 41 |
|----------------------------|----|

●イベントカレンダー

| | |
|--|----|
| | 42 |
|--|----|

●ちょっと名大史

| | |
|--|----|
| | 44 |
|--|----|

名古屋大学と空襲③ ― 東山キャンパス ―

平成27年度入学式を挙





平成27年度名古屋大学入学式が、4月5日(日)、豊田講堂において、大学院は午前9時30分から、学部については、文、法、経済、理、医学部を対象に午前11時から、教育、情報文化、工、農学部を対象に午後1時からそれぞれ挙行されました。

今年度の入学生は、大学院2,217名(修士課程及び博士課程前期課程1,689名、大学院法学研究科専門職学位課程(法科大学院)41名、医学博士課程及び博士課程後期課程487名)及び学部2,219名の計4,436名です。

名古屋大学交響楽団が演奏する「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲(ワグナー作曲)で始まった式典では、松尾総長から、大学院入学生及び学部入学生それぞれに対し、祝辞が述べられました(詳しくは総長の辞をご覧ください)。

次に、各研究科長等の紹介があった後、大学院国際開発研究科博士課程前期課程入学生のゲン・ティ・ミン・フォンさん、理学部入学生の土井淳平さん及び情報文化学部入学生の川嶋康太さんが、入学生総代として、入学にあたり、本学の学生としての本分を全うすることを宣誓しました。



続いて、名古屋大学全学同窓会副会長の柴田昌治氏(日本ガイシ株式会社相談役)より祝辞をいただきました(詳しくは来賓祝辞をご覧ください)。

最後に、名古屋大学混声合唱団が歓迎の歌を合唱し、名古屋大学交響楽団による「交響曲第1番第4楽章」(ブラームス作曲)の演奏とともに、式典は幕を閉じました。

式典終了後には、学部入学生を対象として、学生による「入学祭典」と称したサークル紹介が行われ、様々なサークルによる趣向を凝らしたステージパフォーマンスに、会場は大いに盛り上がりました。

終了後は、豊田講堂の前庭に詰めかけた大勢の学生から、部活やサークル

の勧誘を受けたり、家族などと晴れやかな表情で記念撮影をしたりする入学生の姿が見られました。

入学式の様子は、経済学部カンファレンスホール及びIB電子情報館大講義室、また、本学ホームページ上においてライブ中継され、多くの方々がこの晴れがましい式典に臨みました。

なお、入学式の模様は、現在、本学のホームページ(http://www.nagoya-u.ac.jp/info/26_3.html)で視聴することができます。

平成27年度大学院入学式祝辞

名古屋大学総長 松尾 清一

皆さん、名古屋大学大学院への進学、おめでとうございます。

本日ここに、2,217名の皆さんを、新しい仲間として、名古屋大学大学院に迎えることになりました。名古屋大学のすべての構成員を代表して、皆さんを心から祝福し、歓迎いたします。

皆さんは今、大きな志と期待を胸に抱いて、これから始まる研究生活に思いを馳せていることと思います。皆さんが新しい生活を始めるにあたり、名古屋大学総長として、また大学院の先輩として、皆さんに私の想いを、お伝えしたいと思います。

第一は、大学院で何をするのか、具体的な目標をしっかりと持っていただきたいということです。

大学院での生活は、学部とは異なる次元のものです。即ち、研究を通じて新しい価値を創造するという、最も知的でエキサイティングな活動をする新たな世界に、今まさに皆さんは飛び込もうとしているのです。

名古屋大学では様々な学問領域で、多くの教員・研究者が日々、教育、研究、社会連携、国際交流などの活動を活発に行っています。これらの活動は、新しい価値を創造する知的な成果を生み、ひいては実社会を大きく変えていく原動力にもなっています。これからの皆さん一人ひとりの努力が、学位の取得や論文作成といった皆さん個人に還元されるものだけではなく、社会全体を大きく変え、進歩させていく可能性があることに、ぜひ思いを馳せてください。自分の専門性や課題をしっかりと設定したうえで、果敢に課題解決に向かってチャレンジしていただきたいのです。

工学研究科の天野 浩教授がノーベル賞を受賞するきっかけになった最初の大きな発見は、天野教授が24歳で大学院生の時になされました。もちろん、自然はそう簡単には素顔を見せてはくれません。真理の探究には、研究者の固い信念とたゆまぬ努力が必要です。一方で、素晴らしい研究は、一人だけではできないことも事実です。人と人との関係も重要です。

研究を指導し、ともに苦労を重ねる素晴らしい指導者がいて、それに応えて百千万もの失敗にもめげず頑張る若手研究者がいて、さらには共同研究者や同僚がいて、外には競争相手となる研究者がいて、みんなが切磋琢磨する、というような、幾重にも絡み合う環境の中で、新たな発見がなされるものと思います。

学問は連綿として受け継がれ、発展していくものです。これまでの研究成果の上に、さらにまた新しい成果が積み



重なる、その大きな流れの1つの時代を、ぜひ、皆さん自身の手で創ってほしいと思います。

第二には、分野を超えた連携や多様性の重要性です。

名古屋大学には学部・大学院をあわせて、学生だけで16,000名、教職員も入れると2万名以上の構成員が活動しています。様々な専門分野や領域、様々な国籍など、多彩なバックグラウンドを持つ人々が集まってきています。現代においては、異分野の連携ないし融合による新しい研究成果が続々と報告されています。それらの研究成果は、これまでにない斬新なものが多く、実社会を大きく変えるもの、あるいは変える可能性があるものになっています。課題を明確にして、その解決のために必要な、様々な領域を理解し、異なる専門分野の研究者が連携する事は、新しい価値の創造という観点からは、極めて重要なことです。

名古屋大学においても、異なる分野の研究者が連携して行う異分野融合研究は、急速に増えており、大きな成果を挙げつつあります。このような関係が草の根の様に張っていけば、全体として素晴らしい研究が次々に生み出されると考えています。大学院に進学される皆さんには、ぜひ自分の狭い専門領域に閉じこもらずに、大きな視野で新しい研究にチャレンジしていただきたいと思います。海外留学の経験は、皆さんの視野を大きく広げることでしょう。ぜひチャレンジしてください。

多様性の重要性に関しては言うまでもありませんが、名古屋大学は男女共同参画の推進や、外国人留学生の受け入れを増加させるなど、極めて多様性に富むキャンパスを作ってきています。ジェンダー、国籍、人種、文化、歴史、考え方の違いなど、多くの壁を乗り越えて、お互いに理解しながら問題解決のために協力することは、極めて生産的な戦略であり、重要です。これらの具体的な取り組みが、名古屋大学では先進的に行われていますので、皆さんにはぜひ、肌で感じていただきたいと思います。



第三は、一步踏み出す勇気を持ってほしいということである。

トヨタグループの始祖であり、自ら発明した自動織機で、世界にイノベーションを巻き起こした豊田佐吉翁の座右の銘が、豊田佐吉記念館に残されています。「百忍千鍛事遂全」すなわち「百を忍んで千を鍛えれば目標に到達できる」という言葉です。この言葉はわれわれに大きな希望を与えてくれます。また、昨年ノーベル物理学賞を受賞された赤崎勇名古屋大学特別教授の言葉、「われ一人、荒野を行く」も大きな勇気を与えてくれる言葉です。百千万の失敗がひとつの成功を生んだともいえるでしょう。私は偶然の発見はないと思っています。大事なことは、いつも目標を持って自らを鍛えていないと、偶然の出来事も見逃され、手からこぼれてしまうのです。

もちろん名古屋大学は皆さんをひとりにはしませんし、チャレンジする人にはさまざまなサポートをしています。名古屋大学が募っている名古屋大学基金も、そのひとつであり、留学支援や若手研究者支援を行っています。

最後に名古屋大学とその未来について簡単に触れておきます。

名古屋大学はその長い歴史の中で、学界、産業界をはじめ多彩な分野で数多くの人材を輩出して、我が国と世界の発展に大きな貢献をしてきました。

名古屋大学の源流は、明治維新直後の1871年にさかのぼりますが、幾多の変遷を経て、1939年には最後の帝国大学となり、1949年に新制名古屋大学となって、総合大学の基礎が固まりました。東京、大阪に次ぐ大都市である名古屋に、我が国屈指の国立大学を創りたい、という地元各界の皆様が熱烈な想いにも支えられ、名古屋大学はここまで成長してきました。

名古屋大学の理念は、2000年に制定された名古屋大学学術憲章に明確に記されており、その内容は制定後15年を経

過した今日でも色あせることはなく、むしろ燦然と輝いています。その中で、「名古屋大学は基幹総合大学として、人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献することを、その使命とする」とあります。

我々の住むアジアは、目覚ましい経済成長を続けており、世界をけん引し始めているといっても過言ではないでしょう。

さらに名古屋大学が位置する中京圏は、日本だけでなく、世界でも有数のものづくり産業の集積地です。今後も、名古屋大学から、地域と世界に貢献できる人材を、数多く育成することが期待されています。

一方で世界は今、多様な価値観や異文化が交錯し、目覚ましい勢いでグローバル化が進んでいます。それに伴い、これまでの常識では想像できなかった、様々な矛盾や問題が噴出しています。また、我が国では、世界でも類をみない超高齢社会がすでに到来しており、国の将来に対する不安が広がっています。国の内外で、解決すべき課題が山積しています。

皆さんには、どのような専門領域に進もうと、ぜひ高い志を持って、このような人類的な課題に果敢にチャレンジしてほしいと思います。私たち教職員も、これからは名古屋大学を一段と高い地平に引き上げるために、「日本屈指の大学から世界屈指の大学へ」を新たな旗印に、大学を発展させていきたいと考えています。

皆さんが名古屋大学大学院で過ごすこれからの時間は、まさに自分を鍛えて大きくする絶好のチャンスです。皆さんにはこれから名古屋大学の一員として、勇気と希望を持って前にすすみ、個性や能力を思う存分伸ばしていただきたいと思います。

名古屋大学での学生生活が皆さんにとって、実り多く充実したものになるよう、強い願いを込めて、私からの祝辞といたします。本日は本当におめでとうございませう。

平成27年度学部入学式祝辞

名古屋大学総長 松尾 清一

新入生の皆さん、名古屋大学への入学、おめでとうございます。
います。

本日ここに、2,219名の学部学生を新しい仲間として、名古屋大学に迎えることになりました。名古屋大学のすべての構成員を代表して、皆さんを心から祝福し、歓迎いたします。

皆さんは、大学受験という厳しい試練を乗り越えて、名古屋大学に入学しました。すべての皆さんが、これから始まる名古屋大学での生活に、夢と期待を膨らませていることと思います。

皆さんがこれから、名古屋大学で新しい生活を始めるにあたり、名古屋大学総長として、また大学の先輩として、私の想いを皆さんにお伝えしたいと思います。

第一は、大学で学ぶということの意味を、自分の中でしっかりと考えてほしいのです。

皆さんは厳しい受験を乗り越えて、名古屋大学に入学しました。高校における基礎的な学力はしっかりと身につけていると思います。それでは皆さんはこれから名古屋大学で、何を学ぶのでしょうか？

皆さんが将来どのような道に進むにしろ、最終的にはそれぞれの専門性を活かして、様々な分野でリーダーシップを発揮しながら、人類や社会に貢献する事が、最終的なゴールです。

名古屋大学では、高い専門性はもちろんのこと、幅広い視野と教養を備え、社会貢献の高い志を持ち、グローバルにリーダーシップを発揮できる人材を育成したいと考えています。そのために、全学部の教員が参加しておこなう全学教養科目を実施しています。学部を問わず、知識人として必要な共通の課題を取り上げて教育を実施し、総合大学ならではのダイナミックな教育が展開されているのです。皆さんには、ぜひ、自ら積極的に、思う存分、広大で深遠な学問の香りを胸いっぱい吸い込んでいただきたいと思います。その上で、最終的な目標である人類や社会に貢献するという意味を考え、その喜びと困難さを体験し、これからの人生で自分がチャレンジすべき課題の探求、専門分野の選択と実践、国内海外を含めて多くの体験と友達づくりなどを、試行錯誤しながら一步一步、成長していただきたいのです。

第二は、他者への思いやり、自分以外の人を深く理解しようとする心、国際的な交流であれば相手の文化や歴史、立場をまずはよく知り、理解しようとする心をはぐくみ、



実践するということです。コミュニケーションという言葉は、情報のやり取りのほかに相手の情緒を理解するという意味も込められています。人と人の付き合いの範囲も、高校時代とは違った規模で広がっていくと思います。名古屋大学には大学院も含めて学生だけで16,000名、教職員も入ると2万名以上の構成員が活動しています。しかも、多彩なバックグラウンドを持つ人々が集まってきています。名古屋大学は多様な人々とのコミュニケーション能力を高める素晴らしい場であると思います。お互いを理解しあうことは、人間同士の垣根を低くし、お互いを尊敬しあう第一歩です。そのような関係が草の根の様に張ってゆけば、素晴らしいヒューマンネットワークができます。積極的に友達づくりに励んでもらいたいと思います。

情報を伝える、情緒を理解する、ということに加えて、より具体的に、言語、文化、生活習慣、歴史、人間性、心理など幅広い視野から相手を理解することが必要で、私は、理系の学問に加えて、人文系の学問や科学は価値あるものと考えています。コミュニケーションを単なる情緒的なものにせず、科学的にもしっかりと裏打ちすることで、より正確で強固なコミュニケーションができると考えています。総合大学としての名古屋大学には、このようなリソース（教員、情報、ネットワーク、設備など）が備わっています。新入生の皆さんは、ぜひこれらのリソースを利用しながら、名古屋大学で新しいコミュニケーションの形を創造してください。

多様性の重要性に関しては言うまでもありませんが、名古屋大学は男女共同参画の推進や、外国人留学生の受け入れを積極的に進め、極めて多様に富むキャンパスを作ってきています。ジェンダー、国籍、人種、文化、歴史、考え方の違いなど、多くの壁を乗り越えて、お互いに理解しながら問題解決のために協力することは、極めて生産的な戦略であり、重要です。これらの具体的な取り組みが、名古屋大学では先進的に行われていますので、皆さんにはぜひ

ひ、肌で感じていただきたいと思います。

英語力に関して一言触れておきます。名古屋大学は国際化を目指しており、実際、キャンパスは急速に国際化しています。コミュニケーションの共通の道具としての英語力は特に重要であり、名古屋大学では英語でのコミュニケーション能力を重視して、様々な英語力強化のプログラムを実施しています。ぜひ積極的に英語でのコミュニケーション能力の向上にチャレンジしてください。海外への留学はそのよいきっかけになると思います。ぜひ在学中に海外留学を体験しましょう。

第三は、失敗にくじけず、前に進む勇気を持ってほしいということです。

トヨタグループの始祖であり、自ら発明した自動織機で、世界にイノベーションを巻き起こした豊田佐吉翁の座右の銘が、豊田佐吉記念館に残されています。「百忍千鍛事遂全」すなわち「百を忍んで千を鍛えれば目標に到達できる」という言葉です。この言葉はわれわれに大きな希望を与えてくれます。また、昨年ノーベル物理学賞を受賞された赤崎 勇名古屋大学特別教授の言葉、「われ一人、荒野を行く」も大きな勇気を与えてくれる言葉です。百千万の失敗がひとつの成功を生んだともいえるでしょう。私は偶然の発見はないと思っています。大事なことは、いつも目標を持って鍛えていないと偶然の出来事も見逃され、手からこぼれてしまうのです。研究だけではなく、人生全般に同じことが言えるでしょう。

もちろん名古屋大学は皆さんをひとりにはしませんし、チャレンジする人にはさまざまなサポートをしています。名古屋大学が募っている名古屋大学基金も、そのひとつであり、留学支援や若手研究者支援を行っています。

最後に名古屋大学とその未来について簡単に触れておきます。

名古屋大学はその長い歴史の中で、学界、産業界をはじめ多彩な分野で数多くの人材を輩出して、我が国と世界の発展に大きな貢献をしてきました。

名古屋大学の源流は、明治維新直後の1871年にさかのぼりますが、幾多の変遷を経て、1939年には最後の帝国大学となり、1949年に新制名古屋大学となって、総合大学の基礎が固まりました。東京、大阪に次ぐ大都市である名古屋に、我が国屈指の国立大学を創りたい、という地元各界の皆様のご熱心な想いにも支えられ、名古屋大学はここまで成長してきました。

名古屋大学の理念は、2000年に制定された名古屋大学学術憲章に明確に記されており、その内容は制定後15年を経過した今日でも色あせることはなく、むしろ燦然と輝いています。その中で、「名古屋大学は基幹総合大学として、人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献することを、その使命とする」とあります。

我々の住むアジアは、目覚ましい経済成長を続けており、世界をけん引し始めているといっても過言ではないでしょう。

さらに名古屋大学が位置する中京圏は、日本だけでなく、世界でも有数のものづくり産業の集積地です。今後も、名古屋大学から、地域と世界に貢献できる人材を、数多く育成することが期待されています。

一方で世界は今、多様な価値観や異文化が交錯し、目覚ましい勢いでグローバル化が進んでいます。それに伴い、これまでの常識では想像できなかった、様々な矛盾や問題が噴出しています。また、我が国では、世界でも類をみない超高齢社会がすでに到来しており、国の将来に対する不安が広がっています。国の内外で、解決すべき課題が山積しています。

皆さんには、どのような専門領域に進もうと、ぜひ高い志を持って、このような人類的な課題に果敢にチャレンジしてほしいと思います。私たち教職員も、これから名古屋大学を一段と高い地平に引き上げるために、「日本屈指の大学から世界屈指の大学へ」を新たな旗印に、大学を発展させていきたいと考えています。

皆さんが名古屋大学で過ごすこれからの時間は、まさに自分を鍛えて大きくする絶好のチャンスです。皆さんにはこれから名古屋大学の一員として、勇気と希望を持って前にすすみ、個性や能力を思う存分伸ばしていただきたいと思います。

名古屋大学での学生生活が皆さんにとって、実り多く充実したものになるよう、強い願いを込めて、私からの祝辞といたします。本日は本当におめでとうございませう。

来賓祝辞（平成27年度大学院入学式）

柴田 昌治 名古屋大学全学同窓会副会長
日本ガイシ株式会社相談役



皆さん、今日は大学院へのご進学、誠におめでとうございます。すでに松尾総長から大学院生としての心構え、あるいは勉学についてのいろいろなご指導の言葉がございました。私は全学同窓会を代表いたしまして一言、入学のお祝いの言葉と、もう1つは先輩として、これから皆さんがどういふことを重要視して研究に、あるいはいろいろな活動に資していられるかということについて、少しお話をさせていただきます。

全学同窓会というのは平成14年に発足しました。それまで名古屋大学では、卒業生はそれぞれ医学部は医学部、経済学部は経済学部というように、学部ごとのOBの会がございましたけれども、全てをまとめた全学同窓会というのはありませんでした。これは、東大であっても、どこであっても、みんな同じことでした。全学同窓会は、将来皆さんが実業界、あるいはいろいろな国際会議に出た場合、全学同窓会のメンバーとして、活躍の場がグローバルに広がるようにという意味で作り、発足以来、トヨタ自動車の豊田章一郎名誉会長が会長を務め、私も発足以来、副会長を務めております。今ではもう、会員が12万人になっており、国内では関東、関西、浜松の3支部と、海外には、北京、上海、ベトナム、モンゴル、ウズベキスタンなど、アジアを中心に14カ所の支部ができあがっております。こういう国々から来られた留学生を中心として、もうすでに12年有余が経っておりますから、卒業した留学生たちはそれぞれの母国で、名大で学んだことをベースに、その国の中枢の役職に就いておられます。

これからはやはりアジアでの日本として、このようなポジションに就かれた人々とのコンタクトが非常に重要になってまいります。その時のために、そういう先輩方とい

ろいろな意味でそれぞれの国で今後、活動されるであろう皆さんが活躍できるのを見たいというのが、全学同窓会の活動の狙いでもあります。

さて、これから研究に邁進される大学院生の心構えについては、先ほど松尾総長からいろいろアドバイスがありましたけれども、私からは先輩として、お話をさせていただきたいと思います。

1つはグローバルアイを持ったプロフェッショナルな国際人になってほしいということでもあります。グローバルアイというのは、今それぞれ皆さんが、これから研究されるサブジェクトのレベルが、一体グローバルのスタンダードで見た時に、どの位置にあるか。つまり日本だけの、国内での研究のレベルではなくて、グローバルに見た時に、イギリスでもアメリカでも、あるいは中国でもインドでも、一体どういうレベルで研究しているかということと比較する視点であり、自分のやっている事柄に、ある意味の国際的な客観的な評価を与えることが重要だと考えます。

それでは国際人というのは一体何でしょうか。英語ぐらいは身に付けておくことは当然ですけれども、それ以上にもっと重要なことは何かといいますと、どういう文化、環境、どういう考え方で育ってきたかによって、相手の人はいろいろな考え方を持っています。その相手の考えている、あるいは育ってきた環境を十分理解し、それと同時に、日本人として自分たちがこの国の歴史について、あるいは文化について、その人と語りあえる、つまり異文化との対応が対等の立場でできる人が国際人であります。

残念ながら今の日本の置かれた状況というのは、若干、国際競争力が減退してきております。スイスのIMDという国際研究機関で、毎年、世界競争力年鑑というものを出

しております。1990年代前半頃までは60カ国中、日本の国際競争力というのは、アメリカと並んで1位または2位でありました。ところが、このところ急激にこの国際競争力の日本への評価が下がっております。昨年は60カ国中21位でありました。この国際競争力の評価というのは、政治、文化、経済など4つの大項目からなる評価の結果であります。残念ながら日本は非常にその地位が低下しております。

また、同じようにスイスのダボスで毎年1月の終わりにダボス会議という会議が行われます。大体3,000人ほどの世界中の政治、経済、あるいは情報分野などのトップが集まって、その時それぞれの問題を世界的にディスカッション・ディベートしようという会議であります。残念ながらダボス会議の200ぐらいある分科会の中で、私は1999年から10年連続して出席しておりましたけれども、最後の方は日本の分科会の数が1つとか2つとかいったように、非常に残念な結果でありまして、一番ひどい時は、日本はどうして没落したのかというセッションが行われるぐらいでした。こういう国際的な認識を、もう一度我々はかつての1990年代前半までアメリカと並んでトップであったという地位を取り戻す必要があります。そのためには、ここにおられる皆さんがグローバルなアイで自分の研究その他が、国際的なスタンダードで見て、どの程度に来ているのかということ、よく比較をしながら、そのグローバルアイで、グローバルなスタンダードでものごとを見ながら研究を進めていくということが非常に大事であります。

また同時に、先ほど国際人ということをお申し上げしましたが、それを身に付けるためには、是非2つのことを心がけていただきたい。



1つは自分の専門のプロフェッショナルへの勉強は当然でありますけれども、日々いろいろなことを書いた本を読む習慣を付けてほしいということ。2つ目は、やはり大学院で学んでいる間に、将来、諸君が世界に羽ばたいていくためには、それぞれの国から来ておられる留学生を中心に、グローバルな感覚を身に付けるために是非、親友を作っていただきたい。この2点であります。

いろいろ申し上げましたけれども、日本のそういう良い面を人に十分訴えるためには、それなりに自分の国の歴史なり文化についての深い理解が必要であります。そのことをお願いいたします。今後皆さんが頑張って勉強に励まれることを期待いたします。先輩としてのご挨拶に代えさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。



来賓祝辞（平成27年度学部入学式）

柴田 昌治 名古屋大学全学同窓会副会長
日本ガイシ株式会社相談役



皆さん、名古屋大学の入学、誠におめでとうございます。皆さんは入学を今日2,219名の仲間と共に祝うわけですが、皆さんの受験勉強を支えていただいたご家族の方もたくさん、今日は別の場所で皆様の入学式を見守っているということを聞きました。ご家族の方にも皆様からよくお礼を申し上げてください。

考えますと、私は昭和30年にこの名古屋大学に入学したわけですが、当時、新入生は滝子にあった教養学部というところに入り、私は法学部ですから、後半の2年間はお城、名古屋城の二の丸庭園のところで授業を受けたため、こういう立派な入学式も覚えてなければ、こういう素晴らしい学園生活を楽しめるような環境にはありませんでした。それでも今でも卒業した時の仲間と一緒に、昔の名大をよかったなという話をしております。

それで今日は先輩として、入学される方々に是非お願いしたいことがいろいろあるわけですが、その前に名古屋大学の全学同窓会の副会長として今日は出席しておりますので、少し名古屋大学の全学同窓会についてお話をさせていただきます。名古屋大学の全学同窓会というのは、平成13年に準備をして平成14年から立ち上がっておりますから、もう12年半になると思いますけれども、国内では関東支部、関西、浜松と3支部があり、そのほか海外に14カ所の同窓会支部があります。主としてアジアにあります。北京、上海、ソウル、シンガポール、またモンゴルにもありますし、ウズベキスタンにもあります。

現在、全学同窓会に在籍するOBの総数は12万名ということで、この方々が、皆様が4年後かあるいは6年後に社会人として巣立っていった時に、それぞれの海外におけるネットワークとして、いろいろな意味で頼りになる名大

の同窓会となるように、トヨタ自動車の名誉会長である豊田章一郎さんが現在まで同窓会の会長を務め、私も発足の時から副会長を務めております。従って、こういう同窓会というグローバルなネットワークができてきているのは、皆さんにとっても将来きっと役に立つと思います。

今、大学の新生として、学生生活を送るのに必要な事項は、松尾総長からいろいろと皆さんにお話がありました。私は先輩として皆さんにいくつかのことを申し上げたいと思います。

1つは、大学の生活というのは勉強はもちろんのことですが、皆さんは今、入学試験を突破してホッとされておられると思います。しばらくはホッとさせていただいて結構です。やはりエンジョイするための大学ですから。それでいくつかお願いしたいのは、スマートフォンなどそういった新しい情報機器だけでいろいろなことを知るのでなく、自分で世の中のことを理解するためには、グローバルアイを持った国際的な考え方を身に付けてほしいということです。グローバルアイを持つとはどういうことかという、今、自分たちがこれから勉強して、どういうことを学ぼうかと考える時に、世界の人たちは何を考え、何を勉強しているかということに思いを馳せることであります。

国際人というのは一体何かということをお話すると、先ほど総長のお話にもありましたが、相手の人、それはおそらく日本とは全く違った環境で育ち、全く違ったところで勉強して、宗教も違えば環境も違う、文化も違うというところで育った様々な考えを持つ人々と対話ができる人のことであります。先ほど総長はコミュニケーションという言葉が使われましたが、そういうことなんですね。つまり



相手の立場がきちっと理解ができ、それから自分の考えていることが相手にきちっと伝わる。そういうことが国際人の資格であって、もちろん英語やその他の言語は重要でありますから、是非勉強してもらいたいです、そういう理解を持って、日本国内のことだけではなくて世界のことに思いを馳せたグローバルなアイを持ち、その上でグローバルな人になってほしいということでもあります。

それからもう1つは、大学にいる間に友人を作っていたきたい。友人というのは、皆さんがこれから何十年も生きていく中でいろいろなことが起きてまいります、その時に相談のできる、信頼のできる存在です。そういう親友を持つということは非常にいろいろな局面で大事になってまいります。従ってそういう友人を作る場所、勉学の場所だけでなく、友人を作る場所だということを頭に入れておいていただきたいと思います。

また、先ほど申し上げた国際人として、自分の国の文化と伝統をいつの場合でも語れるためには、受験勉強で習った日本史や国際の話だけではなくて、実際に本を読んで、この国の文化と歴史というものについて、相手の人が理解できるような知恵を、スマートフォンなどの情報機器だけではなくて、必ず自分で本を読むという習慣で身に付けてほしい。これを是非お願いしたいと思います。

それから最後になりますけれども、皆さんはこれからの学生生活のプランニングをする上で、是非、留学経験を持って、できれば世界のいろいろなところへ出かけて行って、そこから日本を客観的に見ることができ、そういうことを考えていただく必要があります。つまり今から就職のこと、あるいは自分の先のことを考えるよりも、自分の身に付けたその国際性というのが将来、非常に役に立つと

いうことで是非、留学をお勧めしたいと思います。

これからは企業も就職活動に来た人たちに、そういう海外での留学経験のある人を優先的に採用するように考えたということ、名古屋大学の卒業生で私よりも少し後輩にあたる経団連の榊原定征会長にも言って、経団連でもそういう大学生が入ってくる時には、国際経験、留学経験のある人を優先的に採用するようにと各経済界のトップの人に話しております。これを是非忘れないように、やはり1年なり海外から日本を見るということは、きっと皆さんにとってプラスになると思います。

私ごとですが、私は名古屋の高校を出て名古屋大学に入って、昭和34年に卒業し、その後すぐ6年間大阪に行って、そこから急にニューヨークへ行けということでニューヨークに7年間いて、そのあと10年間東京にいて、その後またアメリカで社長を5年間やれということで、結局30年間名古屋から離れました。しかし、名古屋大学で習った、いろいろな友人関係をもとに、大過なく過ごせたのも、そういう経験があったからだと思いますし、外から世界中を回って日本を客観的に見るという癖が付いたのは、今でも私の人生の中でプラスになったと考えております。是非皆さんもそういったことを心がけていただきたいと、これが先輩としてのお願いでございます。

最後に、いずれにしましても、この難しい試験勉強がすんで、しばらくはホッとされていると思いますので、体調に気を付けて、自分のこれからの4年なり6年なりの大学生活を楽しむための基礎の考え方を身に付けていただくことをお願いいたしまして、本日の皆様への言葉とさせていただきます。いずれにしても大変、入学おめでとうございます。

イノベーションに最も適した国を目指す名古屋大学シンポジウムを開催

イノベーションに最も適した国を目指す名古屋大学シンポジウムが、4月8日(水)、ES総合館ESホールにおいて開催されました。本シンポジウムは、ノーベル物理学賞を受賞した天野 浩工学研究科教授の青色LED研究開発及び内閣府・革新的研究開発推進プログラム(ImPACT)の取り組みの紹介を通じて、真に「イノベーションに最も適した国」の実現を目指すために開催されました。会場は、立ち見も出るほど熱気に溢れたシンポジウムになりました。

第1部では、松尾総長並びに久間和生内閣府総合科学技術・イノベーション会議議員が、非連続イノベーションを越えて産業や社会に大きな変革をもたらすための本学及び我が国の方針や取り組みを紹介しました。

続いて、天野教授より、青色LEDの研究開発でどのようにイノベーションを起こしてきたのか、自身の苦労話も含めて分かりやすく講演が行われました。ノーベル物理学賞につながった研究が、多くの失敗を重ねながらも、異分野の研究者との交流から、新規材料と新規白色光源の開発



パネルディスカッションの様子



あいさつする総長

に結びついたことがイノベーションの源泉となったことが強調されました。

次に、内閣府・ImPACT宮田プログラムが進めている「進化を超える極微量物質の超迅速多項目センシングシステム」の研究開発について、宮田令子プログラムマネージャー(PM)から、身の回りの危険・有害物質である細菌・ウイルス、PM2.5、有害低分子を超高感度・超迅速に多項目検出できる小型センシングシステムの開発が、いつでもどこでも、リアルタイムに、個人向けの危険・有害物質の予報システムの創出と、予防・体調管理の実現をもたらすことが紹介されました。さらに、各プロジェクトの研究開発状況について、川合知二大阪大学特任教授、都甲 潔九州大学主幹教授、馬場嘉信工学研究科教授から最先端の研究成果が紹介され、研究が急速に進捗し、今年度中には、最初のプロトタイプが開発されることが発表されました。

第2部では、内閣府・ImPACTのPMである佐橋政司東北大学リサーチプロフェッサーから究極のエコIT機器開発、伊藤耕三東京大学教授からしなやかでタフなポリマーによる新世代自動車の開発についての最先端研究成果が紹介されました。

続いて、馬場教授が司会を務め、天野教授、佐橋PM、伊藤PM、宮田PMを交えてパネルディスカッションを行い、非連続イノベーションを越えるためには、技術のイノベーションのみならずマーケットイノベーションなどが重要であることと、異分野融合の重要性が指摘されました。さらに、イノベーションに最も適した国を目指すには、失敗しても良い環境作りとハイリスク・ハイインパクトな技術への挑戦が重要であることが指摘されました。

最後に、財満副総長から、イノベーション創出に向けた取り組みを我が国全体に広げることの重要性が指摘され、シンポジウムは盛況のうちに閉会しました。

松尾総長就任式を挙行

本年4月1日付けで、第14代名古屋大学総長に就任した松尾清一総長の就任式が4月1日(水)、シンポジオンホールにおいて挙行されました。式には理事、監事、副総長、副理事の新執行部をはじめ、教職員、報道関係者など200名以上が出席しました。

就任のあいさつの中で総長からは、「日本屈指の大学か



就任のあいさつをする松尾総長

ら世界屈指の大学」を掲げ、地域、世界と連携を作り出せるハブ大学の実現、国際的にリーダーシップをとれる人材の育成、それらの実現に向けて、単純なトップダウンではなく教職員を含めた構成員全員でコミュニケーションをとりながら共同統治というかたちで力を合わせていきたいとの決意が述べられました。

就任式終了後には、広報プラザにおいて、総長、理事出席のもと、報道向けの就任記者会見が行われました。記者からの質問に対して、総長は未来社会創造機構での企業との共同研究や、ナショナルコンポジットセンターでの炭素複合材の研究、世界トップレベル研究拠点プログラムなど世界を相手に行っている取り組みを強みとしてさらに力を入れていきたいこと、また、「世界屈指の大学」への道りは困難ではあるが、全力を尽くしていきたい旨が述べられました。

名古屋大学オープンレクチャー2015を開催

名古屋大学オープンレクチャー2015が、3月21日(土・祝) 東山キャンパス各施設において開催されました。この催しは、本学で研究されている先端研究について少人数の講義スタイルで一般の方に紹介するもので、今回は240名が参加しました。

最初に、本学の概要説明が行われ、その後、各講義室で



中特任助教の講義の様子

講義が行われました。趣向を凝らした実演や体験を行う講義もあり、参加者からは「スポーツを科学的に証明していく講演を初めて聞きました」、「難民問題という漠然としていた事柄に対して、深い理解が出来た」などの声や、高校生の参加者からは「私も名大の理学部で宇宙の実験をしたい」、「有機化学のクリエイティブな面が知れた」といった感想もありました。参加者アンケートでは94%の方から満足、やや満足と回答があり、一般の方が先端研究への興味と関心を深める良い機会になりました。

なお、今回開講された講義は、「難民問題と日本の役割のはなし」(浅川晃広国際開発研究科・講師)、「技が冴える『分子世界の匠』のはなし」(石原一彰工学研究科教授)、「指先の感触と錯覚のはなし」(岡本正吾工学研究科助教)、「光とハイテク色素のはなし」(関隆広工学研究科教授)、「スマホを作るテクノロジーのはなし」(田嶋聡美工学研究科附属プラズマナノ工学研究センター特任准教授)、「素粒子・放射線を“見る”はなし」(中 竜大素粒子宇宙起源研究機構特任助教)、「現代世界の紛争と暴力のはなし」(西川由紀子国際開発研究科准教授)、「スポーツの動きに潜む仕組みのはなし」(山本裕二総合保健体育科学センター教授)の8講義でした。

新 CALE 棟茶室整備寄附目録を受領

今年11月に竣工予定の融合・連携型国際人材育成拠点施設（新 CALE 棟）内に設置する茶室整備費にかかる寄附目録の贈呈が、3月16日（月）、総長応接室において行われました。本寄付は、医療機器メーカーである「東海メディカルプロダクツ」の筒井宣政会長、陽子副会長ご夫妻より贈呈されたもので、鮎京理事をはじめとする全役員の出席



茶室寄附目録を濱口総長に手渡す筒井ご夫妻

のもと、濱口総長が代表して目録を受領しました。

法政国際教育協力研究センター（CALE）は、2002年の設立以来アジア法整備支援事業を展開してきましたが、その功績が評価され、文部科学省により5階建て5,500m²の新 CALE 棟建設の予算が措置されました。新 CALE 棟は、アジア法情報交流の拠点としての広場をめざし、アジアからの多くの留学生・研究者が集う交流空間となります。今回、留学生らが日本文化に親しむ場を提供するための茶室整備というかたちで、筒井ご夫妻から多額のご寄付をいただきました。

筒井ご夫妻は、先天性心疾患を抱える次女佳美さんを救いたいという思いから、人工心臓の開発に取り組むも断念、その後心臓疾患の救急救命器具であるバルーンカテーテルの国産化に初めて成功しました。その豊富な経験に基づいて、フロンティアアジアで活躍できる人材育成に取り組む PhD プロフェッショナル登龍門の学生に対しても客員教授として教鞭を取られています。佳美さんは、若くして他界されましたが、生前、茶道に親しまれていたことから、茶室は、佳美さんの戒名にちなみ「白蓮庵」と名付けられます。完成後は、茶道部の協力を得て、留学生に対する茶道体験会を定期的に開催する予定です。

平成27年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決まる

平成27年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決定され、本学から、科学技術賞で2名、若手科学者賞で2名が選出されました。

この表彰は、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者について、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、我が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的としてお

受賞者は以下のとおりです。

科学技術省

「紫外半導体実用化の基礎研究」

天野 浩 大学院工学研究科教授

「マイクロメカトロニクスとバイオメディカル応用に関する研究」

新井史人 未来社会創造機構教授

り、「科学技術賞（開発部門・研究部門・科学技術振興部門・技術部門・理解増進部門）」・「若手科学者賞」・「創意工夫功労者賞」・「創意工夫育成功労学校賞」の各賞が設けられています。

なお授賞式は、4月15日（水）に文部科学省で執り行われました。

若手科学者賞

「先端的宇宙プラズマ計算機シミュレーション手法の研究」

梅田隆行 太陽地球環境研究所附属

ジオスペース研究センター助教

「高等真核生物における染色体分配制御機構の研究」

西山朋子 高等研究院特任講師

平成26年度実施大学機関別認証評価において 本学が「大学評価基準を満たしている」と認定される

本学では、平成26年度に独立行政法人大学評価・学位授与機構が実施した大学機関別認証評価において、「大学評価基準を満たしている」との評価を受けました。

主な優れた点として、学童保育等の環境整備等による女性教員の支援環境充実、アジア8カ所（7カ国）へのサテライトキャンパス設置及びアジア諸国の国づくりに携わる

国家中枢人材を育成する博士課程後期課程プログラム開始、博士課程教育リーディングプログラム等による特色ある大学院教育、「名古屋大学キャンパス・サインマニュアル」の方針に沿った屋内・屋外サインの多言語化、学生相談・就職支援コーナーの統合的設置等による学生支援サービスの円滑化実現、博士学位取得者のキャリアパスの多様化の推進・実現など9点が挙げられました。一方、主な改善を要する点として、「大学院課程の一部の研究科においては、入学定員充足率が低い」と指摘を受けました。

本学は、評価結果を教育研究活動等の改善に役立てるとともに、今後も教育研究水準の維持及び向上に努めてまいります。

認証評価結果及び自己評価書については以下をご参照ください（平成26年度実施）。

大学機関別認証評価 評価報告書、自己評価書

<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/objectives/mid-obj/index.html>



認定マーク

ナノバイオデバイスが拓く健康長寿社会

馬場 嘉信 大学院工学研究科教授

人の遺伝情報を瞬時に解読し健康を守るナノバイオデバイス

いつまでも若々しく元気に長生きしたいという『不老不死』の考えは、既に、紀元前2000年頃には生まれていたそうです。『不老不死』とは言わないまでも、健康で長生きしたいというのは、多くの人の共通の願いだと思います。

私の研究室は、人類が4000年以上も待ち望んでいた健康長寿な社会を実現すべく、最先端技術を生み出すための研究に日夜取り組んでいます。その鍵を握っているのは、ナノテクノロジーです。ナノテクノロジーは、原子や分子を自在に操り、10億分の1メートルという非常に小さい物質や材料を創る技術です。

私の研究室は、人の健康状態を知るために細胞を精密に取り扱うことのできるナノワイヤ、DNAなどを1秒以内に解析できるナノピラー、1個1個のDNA分子を操作するナノウォール、

1分子のDNAの遺伝情報を瞬時に解読するナノポアなどを開発するとともに、これらを全て超小型デバイスに実現し、遺伝情報解読を超高速度でできるナノバイオデバイスを開発しています（図1）。

人の遺伝情報を解読することは、健康状態を知り健康を守る第1歩です。2003年に人の遺伝情報は解読されましたが、一人分の遺伝情報解読に数ヶ月を要し、100億円以上の費用がかかりました。ナノバイオデバイスを使えば、人の遺伝情報は1時間で、わずか100円で解読できます。この素晴らしい技術は、2020年頃の実現する予定です。

いち早く病気の兆候を見つけ、健康長寿を実現するイムノピラー

健康長寿を実現するには、遺伝情報を解読するだけでは不十分で、日頃の健康状態や体調のわずかな変化を見逃さないことが重要です。私たちは、

いつでも・どこでも健康状態を調べ、いち早く病気の兆候を見つけることのできるナノバイオデバイスであるイムノピラーとポータブルな健康診断装置を開発しました。（図2）

この技術は、1滴以下の血液や唾液から、私たちの日頃の健康状態や体調の変化を瞬時に調べることができます。さらに、近い将来、呼気から健康状態を調べることを可能にします。装置もより小型化されることで、スマートフォ

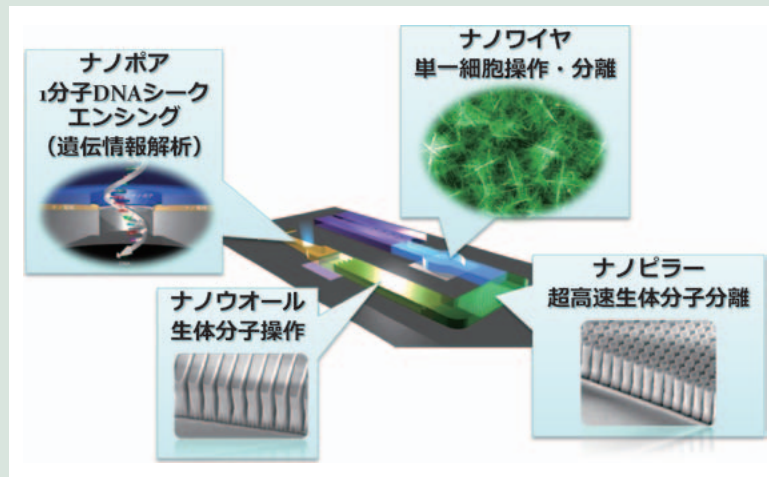


図1 細胞から超高速に遺伝情報を読み取るナノバイオデバイス

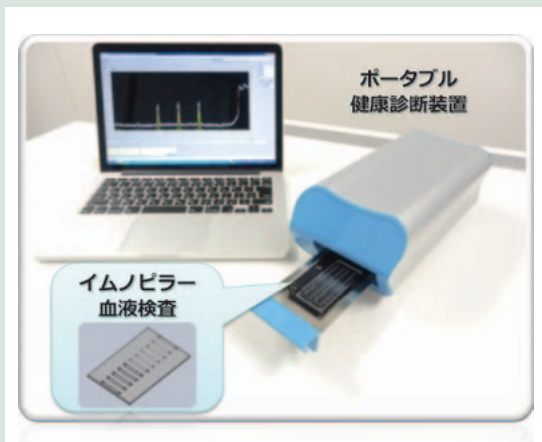


図2 いつでも・どこでも健康診断できるイムノピラーデバイス

ンや腕時計など、モバイル・ウェアラブル機器に組み込まれ、いつでも・どこでも体調を見守り、健康を守る技術を開発する予定です。

iPS細胞による再生医療の実現を加速する量子ドット

健康状態を見守っていても、高齢化により病気になる可能性が高まります。もし、病気になった場合には、薬や手術で治療することに加えて、iPS細胞に代表される幹細胞を用いる再生医療により病気を克服する研究が急速に進展しています。

私たちは、量子ドットによるナノバイオデバイスを開発することで、iPS細胞が、私たちの体の中でどのように治療するかを精密に調べる方法を開発しました。(図3) ナノバイオデバイスは、iPS細胞による再生医療の治療効果を向上させるだけでなく、安全性も高めることが可能です。この技術が、iPS細胞による再生医療の実現を加速しています。

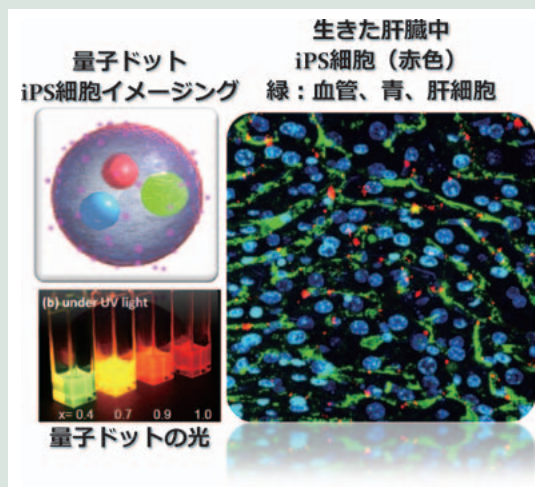


図3 iPS細胞による再生医療を実現する量子ドット

私たちと環境の“健康度”をスマホではかる

ナノバイオデバイスは、私たちの遺伝情報を知り、健康を守る技術として発展しています。さらに、これまでの研究成果をもとに、人の健康度のみだけでなく、環境の“健康度”すら調べられるナノバイオデバイスの開発を進めています。この技術が開発されれば、スマートフォン等に組み込まれたデバイスが、環境中の有害・危険物質であるPM2.5、細菌、ウイルス、花粉、有害分子等をいつでも・どこでもリアルタイムに調べるだけでなく、有害物質の予報で予防を実現し、私たちの健康を守ります。ナノバイオデバイスは、人と環境の“健康度”を簡単・迅速に知ること、人類4000年の夢である健康長寿社会を実現します。

私の研究室は、これからもナノバイオデバイスで世界を変える研究にチャレンジしていきます。

熊本県人吉市生まれ 1981年九州大学理学化学科卒、同理学研究科博士課程化学専攻修了、理学博士。大分大学助手・講師、神戸薬科大学講師・助教授、徳島大学教授を経て、2004年名古屋大学大学院工学研究科教授、2010年同大学革新ナノバイオデバイス研究センター長、2015年同大学先端ナノバイオデバイス研究センター長になり現在に至る。
 モットーは、異分野領域の未解決課題にチャレンジし続けること。

ばば よしのぶ



梶原 義実
大学院文学研究科准教授

構内遺跡調査の成果と意義

私が専門とする考古学は、遺跡や遺物という、人類が過去に遺した物質資料をもちいて、歴史を復原する学問です。その領域は多岐にわたりますが、私が取り組んできている課題のひとつに、古代（飛鳥・奈良・平安時代）における手工業生産史の復原があります。とくに窯業生産は、当時の基幹産業のひとつであり、その生産と流通に、国家や地方の有力者、また一般の人々がどのように関わってきたのかを知ることは、律令制下の地方政策や産業経済史をあきらかにするための重要な素材のひとつとなります。

名古屋大学の東山キャンパス内には、6世紀から13世紀にかけての土器・陶器を焼成した窯跡が、約20基確認されています。考古学研究室ではこれらの窯跡の発掘調査を継続しておこなっており、いままで東山114号窯・61号窯・39号窯・72号窯と、4基の窯跡を調査しました。各窯からはそれぞれ、須恵器や円筒埴輪、灰釉陶器（白色系の釉薬を掛けた高級陶器）、山茶碗（無釉の在地向け日常雑器）など多くの遺物が出土しております。

東山キャンパス内を含む名古屋市東部丘陵一帯は、猿投窯と呼ばれる古代の一大窯業生産地であり、本学名誉教授であられた故榑崎彰一先生らによって分布調査がおこなわれ、約1000基の窯があったことがわかっています。この分布調査で採集された土器・陶器類を基準資料として、猿投窯の土器・陶器の年代が決められました。近年ではそれに対して調整や見直しの動きも出てきており

ます。土器・陶器は生産遺跡ばかりでなく、集落や官衙、古墳などあらゆる遺跡から普遍的に出土し、各遺跡の年代を知るための基準となる資料だけでなく、土器・陶器の正しい編年を組むことは、歴史復原へ向けての考古学の基礎を構築する重要な作業です。

今回出土した遺物の多くは、灰原と呼ばれる、窯の操業時に不良品と灰をまとめて捨てたゴミ捨て場の遺構から出土したものです。分布調査での地表面で採集された遺物に比べて、操業当時の遺構・地層から一括して出土したこれらの遺物は、混じりなく同時期の遺物である可能性が高いといえ、年代判定の基準としてより有効な資料といえます。これら資料価値の高い基礎データの蓄積から、猿投窯の編年を再構築し、そのうえで冒頭で述べたような窯業生産史の総合的復原に繋げていく、構内遺跡の発掘調査にはそのような学問的意義と価値があります。



東山61号窯出土遺物



東山72号窯 発掘調査風景（2014年9月）

私法統一国際協会（ユニドロワ）と協力協定を締結

●大学院法学研究科

大学院法学研究科は、今年3月、私法統一国際協会（International Institute for the Unification of Private Law：ユニドロワ（UNIDROIT））と共同研究プログラム遂行のための協力協定を締結しました。

ユニドロワは、1926年に国際連盟の補助機関としてローマで設立され、現在はローマに本部を置く、独立した政府間組



ロゴマーク

織です。条約・モデル原則を利用した、各国の民商法における現代化、統一化、調整を推進することを目的としています。

同研究科リーディング大学院プログラムは、今年1月、ユニドロワ副事務総長であるアンナ・ヴェネツィアーノ教授を招へいし、ユニドロワの活動に関する2回の特別講演を行うとともに、リーディング大学院をはじめ同研究科の各種プログラムについて意見交換を行いました。その際、内外学生の海外研修先を開拓していることを伝え、同研究科学生がユニドロワにおいて研修を行うことについて打診しました。ヴェネツィアーノ教授は、滞在を通じ、同研究科の活動を高く評価し、ユニドロワでの学生の受け入れについて快諾し、その結果、同協定を締結するに至りました。

同協定締結により、同研究科から、毎年2名がユニドロワにおいて5週間から8週間の研究滞在をすることとなります。ユニドロワは、国際取引法分野における統一作業で最も有名な国際機関の1つであり、学生がそこでの起草作業に直接参加することは、貴重な実務経験・研究の機会を提供するという意味で、重要な意義を有しています。今後は、優秀な人材を同機関に滞在させることで、両者間の信頼関係を一層深め、研究交流の発展に繋げて行く予定です。

持続的共発展教育研究センター公開国際シンポジウムを開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科附属持続的共発展教育研究センターは3月19日（木）、環境総合館レクチャーホールにおいて、公開国際シンポジウム「アジアにおける環境的に持続可能な交通（EST）」を開催しました。このシンポジウムは、国際連合地域開発センター（UNCRD）及び土木学会土木計画学研究委員会平成26年度第16回国際セミナーとの共催



パネルディスカッションの様子

で行われ、国内外の交通・エネルギー・インフラ金融等、多彩な専門家による先進的な知見を共有し、様々な可能性を討議しました。

開会にあたり、松尾副総長は、国内外からの約70名の参加者に歓迎の意を表し、本学のノーベル賞受賞者輩出に代表される基礎研究や教育のほか、日本やアジアでの社会連携活動にも注力し、UNCRDとも協働していること、また、そのための仕組みとして昨年、同研究科附属機関として同センターが設立されたこと等を紹介しました。

関莊一郎環境省地球環境審議官（池田善一中部地方環境事務所長代読）及び高瀬千賀子 UNCRD 所長のあいさつ、C.R.C. モハンティ UNCRD 環境プログラムコーディネーターの「アジア EST 地域フォーラムの成果」講演、林同センター長の基調講演「バンコク宣言2020を越えて」、2つのパネルディスカッション「統合的 EST 政策とレジリエンス」、「官民パートナーシップ—ESTのための戦略的金融・投資」と活発な討議が続きました。閉会にあたり、久野同研究科長から、ESTの多様な問題解決には統合的アプローチが重要であることが述べられました。

「海藻絵はがきを作ってみよう」を開催

●博物館

博物館では3月28日(土)、「海藻絵はがきを作ってみよう」を開催しました。この催しは、同日まで同館で開催していたスポット展「海藻コレクション-津波にさらわれた8万点の標本」の関連企画として行われ、延べ42名が参加しました。陸上植物だけでなく海藻にも押し葉標本があり、その製作方法を学ぶと同時に海藻に興味を持ってもら



海藻絵はがき作成の様子

うことを目的としたものです。講師には、今回のスポット展で取り上げた故吉崎誠先生の直弟子である藤田隆夫先生を迎えました。藤田先生は、芸術のような標本を作る吉崎先生の思い出も語りながら、海藻標本の作り方だけではなく、上手に作るコツを参加者に伝えました。参加者のほとんどが、海藻標本作り初体験の方ばかりでしたが、一生懸命に標本や海藻の切れ端を使った絵はがきを作り、新聞紙に挟んで、大切に持って帰りました。参加者からは、「今度、海岸で海藻を見つけたら、標本を作ってみたい」、「こんな企画をまた開催して欲しい」、「上手に出来て満足した」など多くの感想が寄せられました。

特別展「2014年ノーベル物理学賞-青色LEDの開発研究」を開催

●博物館

博物館では、2014年ノーベル物理学賞が赤崎 勇特別教授と天野 浩工学研究科教授に授与されたことを記念し、昨年12月9日(火)から4月11日(土)の間、第20回特別展「青色LEDの開発研究」を開催しました。同展示では、LEDのしくみや赤崎・天野両教授が本学で行った青色LEDの研究について分かりやすく紹介するために、パ



ガントモル モンゴル教育文化科学大臣に青色LEDの説明をする天野教授

ネルやビデオ、スライドショー、3色LED体験装置などを設け、その準備には赤崎記念研究館や天野研究室、名城大学赤崎研究室の協力を得ました。また特別展示品として、ノーベル博物館への寄贈品と同種のLEDデモンストレーション機や、大学院生時代の天野教授の実験風景の写真が天野研究室から提供され、注目を集めました。その他、ノーベル賞受賞決定時や授賞式(ノーベルウィーク)の両教授の様子についても紹介しました。1月31日(土)には特別講演会を開催し、あいちシンクロトロン光研究センター所長である竹田美和名誉教授の講演「赤崎先生・天野先生ノーベル物理学賞への軌跡」が行われました。

今回の特別展や特別講演会の様子は、報道や一般向け科学雑誌などでも紹介され、展示期間中に約1万人の来館者がありました。特別展期間は終了しましたが、青色LED研究の展示は、「名古屋大学におけるノーベル賞研究」の紹介コーナーに加えられ、今後も同館で一般公開される予定です。

ICCAE 第15回オープンフォーラムを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、3月16日（月）、東京都内において、第15回オープンフォーラム「開発途上国における農業生産・流通・消費を結ぶ国際協力を目指して－“売れる農産物”の生産に向けた研究・協力のあり方－」を開催しました。今回は研究者、学生、政府関係者、国際開発実務者など約60名が参加しました。



フォーラムの様子

開発途上国における農業支援では、農産物の増産や高品質化等に向けた多くの研究・技術指導が行われてきましたが、販売に結びつかない農産物の生産は、農家の所得向上に至らないことから、研究・開発や技術指導の段階から市場を意識することが求められています。

フォーラムでは、山内 ICCAE センター長、榎本雅仁 JICA 上級審議役、佐藤兆昭文部科学省大臣官房国際課政策情報分析官によるあいさつに続いて、農産物の流通・消費に携わる渡辺能敬イオン商品調達株式会社取締役、生産・普及に携わる杉山俊士 JICA 国際協力専門員、農産物の研究・開発に携わる吉村 敦九州大学教授の3名が現場の状況や課題について発表を行いました。

板垣啓四郎東京農業大学教授をモデレーターとして迎えた総合討論では、市場を視野に入れた研究・協力のあり方について議論しました。グローバル化に伴い、農産物の生産から消費までの流れが長く複雑になっていく中、普段は局所的に関与している様々な立場の人々が一堂に会し、開発途上国の農業支援に向け、流れ全体を踏まえた上で、自らの役割を再認識する有意義な機会となりました。

素粒子宇宙起源研究機構講演会を開催

●素粒子宇宙起源研究機構

素粒子宇宙起源研究機構は、4月8日（水）、理学南館坂田・平田ホールにおいて、講演会「明らかとなる素粒子の世界－3人のノーベル物理学賞受賞者が語る－」を開催しました。今回、3名のノーベル物理学賞受賞者、ヘーラルト・トーフト ユトレヒト大学教授（1999年ノーベル物理学賞受賞）、素粒子宇宙起源研究機構長である益川敏英特

別教授（2008年ノーベル物理学賞受賞）、小林 誠特別教授（2008年ノーベル物理学賞受賞）を招き、第1部にトーフト教授による講演「巨大加速器実験 LHC は我々に何をしてくれるのか?」、第2部に3名をパネリストとしての座談会という2部構成で行われました。

第1部では、同機構副機構長を務める國枝理事による機構の紹介、野尻基礎理論センター長による講師紹介、その後、トーフト教授より現在に至るまでの素粒子物理学を俯瞰した解説、将来への展望、そして本学が大きく貢献している LHC 実験への期待が語られました。講演は英語により行われましたが、トーフト教授の熱の入った講演に聴衆は真剣に聞き入っていました。第2部の座談会は、会場から質問に答えるという形で行われ、30以上の質問が集まり、中には、高校生からの質問もありました。3名からは丁寧な回答が述べられ、また、研究者を目指す若い人々への励ましの言葉も多く語られ、中心的な参加者であった学生にとっても深く印象に残る会となりました。最後に、飯嶋現象解析研究センター長の閉会の辞により盛況のうちに終了しました。



座談会の様子

平成26年度動物慰霊祭を挙行

●大学院医学系研究科



献花の様子

大学院医学系研究科では、3月19日(木)、実験動物供養碑前において、医学の教育研究の発展に貢献した動物を慰霊するため、平成26年度動物慰霊祭を執り行いました。

最初に、医学研究のために尊い生命を捧げた多くの実験動物に対して、感謝の意を込めて参列者一同による1分間の黙祷が行われました。

当日は、寒風の吹く雨天の中、高橋医学系研究科長をはじめ、教職員、学生等138名が参列し、実験動物の冥福をお祈りしました。

祭儀では、高橋研究科長から、「実験動物の医学研究への貢献に対し感謝の意を捧げるとともに、動物福祉の観点から適正な動物実験の実施に留意して、医学医療の進歩・発展のために一層努力する」と慰霊のことばが述べられました。続いて、参加者による実験動物供養碑に献花が行われ、最後に、門松実験動物部門長のあいさつで閉じました。

「ふみよむゆふべ」を開催

●附属図書館



講演する山内氏

附属図書館は、3月24日(火)、中央図書館2階ディスカバリスクエアにおいて、第35回友の会トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催しました。

今回は、東日本国際大学特任教授・筑波大学名誉教授で元筑波大学附属図書館長の山内芳文氏による、「『エミール』の世界—その出版と教育への期待—」と題した講演が行われ、学内外から35名の参加がありました。

講演では、まず、『エミール』の著者ジャン・ジャック・ルソーが童謡「むすんでひらいて」の作曲者に擬せられている背景について、原曲を聴きながら説明がありました。続いて『エミール』の出版に至る背景と初版の3つの版が出版後、パリ高等法院判決で禁書になった背景について解説がありました。また、『エミール』で触れられている教育原理を中心に同書の内容について解説がありました。

参加者からは、「教育の永遠の課題について考えさせられる内容だった」などの感想が寄せられました。

ミクロの探検隊®を開催

●博物館



観察を行う参加者

博物館では4月11日(土)、「ミクロの探検隊®—ホニエウ類の組織を電子顕微鏡でみよう」を開催しました。「ミクロの探検隊®」は、同館が行っている電子顕微鏡を使用した体験型次世代教育で、様々なプログラムを取りそろえ、リピーターも飽きないように工夫されています。今回は、まず、生物顕微鏡の使い方を学習した後、ラットの主な臓器組織の標本を生物顕微鏡で観察し、各組織の構造や働きの説明を受けました。その後、走査型電子顕微鏡を使用して、小腸、腎臓、気管を観察し、同じラットでも、臓器によって組織・細胞の構造も全く違い、それぞれの働きによって、より機能的に変化(分化)していることを学びました。また、自ら電子顕微鏡を操作して撮影した写真は、ポストカードにして記念品としました。アンケートでは「また参加したい、科学に興味を持った、説明が分かりやすかった」などの感想が寄せられました。この行事は、医学教育研究支援センター分析機器部門と日立テクノロジーズの協力を得て開催しています。



産学官連携推進本部初の名誉教授として

武田 稯 学術研究・産学官連携推進本部

この度、名古屋大学名誉教授にいただき、有難うございます。特に、教育・研究を本務とする各研究科・研究所ではなく、運営支援組織である産学官連携推進本部からの名誉教授推薦は、名古屋大学としては最初ですし、他の国立大学でも聞いたことがありません。その意味でも、深く感謝致します。

1982年に農学部附属生化学制御研究施設助手として採用されてからの32年間、国立大学を取り巻く状況は大きく変わりました。私も国立大学法人化に伴う産学連携強化の取り組みを始めたのがきっかけで、産業クラスター「東海バイオものづくり創生プロジェクト」の立案・運営等に関与することになりました。産学官連携推進本部に着任してからは、博士学位取得者に対するキャリア支援プロジェクト、「あいちサイ

エンスフェスティバル」等、通常の産学連携とは異なるものも積極的に手がけてきました。

現在では、産学官連携推進本部は学術研究・産学官連携推進本部に改組され、5グループURA30人以上の組織となっています。これからもぜひご活用下さい。私自身は昨年8月からは岡山大学上級URAとして、研究支援・大型プロジェクト立案等の業務を行っております。まだ、本学だけでなく、愛知県の委員等を引き受けておりますので、頻りに名古屋に来ております。何かありましたら、お声かけいただければ幸いです。



知んぬ 世のうつろひの限りを

加藤 國安 大学院文学研究科

八年という年月ではありましたが、皆様方には大変お世話になりました。研究室に集まった人々と授業の中でまた課外で、楽しく学問について語り合っていると、時に古の講筵に迷い込んだかと思うこともありました。今の気持ちを、美濃の大詩人・梁川星巖の「乙巳の季夏、將に西帰せんとして」詩がよく代弁してくれています。

成立するは 宛も新竹の繁きが如し
自ら矜る 才俊の吾が門に聚りしを
一朝 決別するに 能く涙なからんや
看取せよ 斑斑たる満袖の痕を

弘化二年、自ら創設した玉池吟社をたたんで住み慣れた江

戸を去り、郷里の美濃へ帰郷したときの詩です。私の研究ですが、日々学殖豊かな先輩・僚友らに囲まれ、北宋末の李清照の詞「声声慢」の「尋ね尋ね 覓め覓め / 冷冷と 清清と」と、一面ながら相通するところがありました。休みのときには中部の各地を訪ねたことが、脳裡に懐かしく思い出されます。「蘇水（木曾川）遙遙として 海に入って流れ / 櫓声雁語 郷愁を帯ぶ」（頼山陽「舟にて大垣を発し桑名に赴く」）、そのものです。春の花、秋の月に終わりはありませんが、この現世は、古よりどれほどの去来が繰り返されてきたことでしょう。「往事 知んぬ 多少ぞ」（唐・李煜）の詩句が強く胸に響く、今日この頃です。

皆様、どうもありがとうございました。名古屋大学のますますのご発展を心よりお祈りしております。



名大の自由な研究教育の伝統に感謝

早川 操 大学院教育発達科学研究科

長年お世話になった大学を退職するというのは、誰にとっても感慨深いものです。教授会で退職の報告をしてから、これまでの自分の教育研究活動を振り返る機会を何度か与えていただきました。退職は、名古屋大学の教員であったことのすばらしさを改めて実感させてもらうよい機会でした。

4月からの再就職のため、名大の研究室の本を運び出し、新しい研究室に移しました。本棚に本を並べながらふと感じたのは、これらの専門書の内容を学生に教えることが許されたのは名大のような研究大学であったからこそだということです。難解な理論やアイデアを知的挑戦として学生に語ることができたということが、いかに学者冥利に尽きることであったのか、退職を機にあらためて実感しました。研究することが即教育することにつながるという昔ながらのフンボル

ト理念が通用する大学は、わが国でもほんの一握りの大学だけでしょう。このような理念も、グローバル化や市場原理の新たな挑戦にさらされています。その意味でも、わが国を代表する自由な研究大学である名大に在職することができたことに、心より感謝申し上げます。名大の自由闊達な学風が、これからも長く続くことを祈りたいと思います。

長い間お世話になり、ありがとうございました。



アジアから学んで

鮎京 正訓 大学院法学研究科

法学部の助手、講師から始まって、その後、国際開発研究科および法学研究科の教授の時期を含め、全部で28年間、名古屋大学でお世話になりました。

私の研究テーマは、ベトナム憲法史という地味なテーマでしたが、名古屋大学の進取の気性によって、教員として採用されたことは、私にとってとても幸いでありました。

とくに、この20数年は、法学研究科及び法政国際教育協力研究センター（CALE）が推進してきたアジア法整備支援とアジア諸国法研究に関わってきました。その結果、専門のベトナムだけではなく、カンボジア、ラオス、ミャンマー、ウズベキスタン、モンゴルなどの法整備についても研究対象とすることができ、多くを学ぶことができました。近年では、幸いにも、生命農学研究科、環境学研究科、教育発達科学研

究科、医学系研究科などの先生方とも一緒にアジア諸国の諸問題の解明に取り組めたことは、私の生涯の喜びとなりました。

4月より、愛知県公立大学法人理事長として、新しい仕事に就きました。名古屋大学で学んだ自由闊達な精神を發揮し、県立大学と県立芸術大学を一層よい大学にしたいと思っています。

長い間、本当にお世話になりました。心よりお礼申し上げます。



名大病院とファミリーマート名大店

高桑 宗右工門 大学院経済学研究科

名古屋大学大学院経済学研究科に21年間勤務し、このたび退職することになりました。この間に取り組んだ数多くの研究テーマの中でも、名古屋大学医学部附属病院及びファミリーマート名古屋大学店での共同研究が特になつかしく思い出されます。

附属病院の新外来病棟計画においては、病院施設再整備推進室長（当時）の大磯ユタカ教授とともに、外来患者数解析、複数科受診科調査、待ち時間実態調査を行い、電子カルテや各階の計画図面などを基に、患者動線のコンピュータシミュレーション分析を実施し、附属病院の諸先生と検討結果に関する討議を行いました。この研究は、総長裁量経費の支援を受けました。詳細は、名大病院かわらばん・2007年1月15日発行（通刊63号）に掲載されています。

また、ファミリーマート名古屋大学店は2006年7月にオープンし、今日に至るまで共同研究を実施してきました。特に、POS データなどを活用した店舗のマネジメントやスタッフの職務・勤務スケジュールに関するシミュレーション分析をはじめ数多くの研究成果を挙げることができ、国内外の学会・コンファレンスにおいて研究成果を発表しました。なお、開店当時の様子は、同社の2006年7月24日付ニュースリリースにも紹介されています。

最後に、名古屋大学ならびに大学院経済学研究科にたいへんお世話になりました。厚く御礼申し上げます。名古屋大学のますますの発展を祈念致します



シンガポールの産学連携事情

上田 実 大学院医学系研究科

本年4月1日に「名古屋大学名誉教授」の称号をいただき、名大時代が終わったことを実感しています。今は縁あってシンガポール大学（Aスター）でお世話になっております。

ときどき人生「二毛作」という言葉を聞きます。一つの田んぼで二種類の作物をつくるのが二毛作、同じ作物を二回作るのが「二期作」だそうです。私は前々から退職したら別の人生を、と思っていましたので「名誉教授」になるや海外に飛び出しました。

国内の研究職に就くと現職時代の価値観をひきずってしまい「二期作」にしかならないと考えていました。ところがシンガポールのような新興国で研究をするのは二毛作です。というのはAスターという日本でいえば理研のような機関ですらLONZAやMESOBLASTのような企業研究者が多く、

出口のはっきりした超実用的な研究が幅をきかせています。日本では最近でこそ、研究成果の実用化を強調しますが、大学では誰も本気でそんなことを考えている人はいません。Aスターで実際に私が会ったノーベル賞級の学者ですら、「患者の役に立たない医学研究は意味がない」とはっきり言いました。こうしたポリシーが大学（あるいは国）全体に徹底していますから、私のような人間には実に住みやすく、念願の二毛作人生をスタートすることができたのです。

名誉教授の称号は学者人生の前半と後半をくっきりとわけ目印のように思います。



感謝、感謝……ただ感謝！

河村 守雄 大学院医学系研究科

この度、名古屋大学を辞することになりました。学生、研究生、医員、教員として通算45年ほど名古屋大学とは何らかの関わりを持ちながら生きてことになりました。さして優秀ではなかった私がこのように長く名古屋大学に生きてこられたのも、ただ謙虚に、実直に、気配りを忘れず、人との心のネットワークを大切に出来たことに尽きると思います。その繋がりによって、周りの人々に助けられ、様々な影響を受け、自分自身を研鑽しながら今日を迎えることが出来ました。

医学部を卒業して、市井の一医師として生きるつもりでいた私に大きな転機が訪れたのは海外留学でした。それは、毎日研究に没頭でき、多くの人々と接しながら、外から日本を見ることによって、日本の国と日本人であることのすばらし

さを知ることができた2年間でした。そして、帰国時に用意されていた教員職は、私を医療技術者教育への道に引きずり込みました。知識を求める学生たちの輝く目に何とか応えたいと、またこの子たちの兄として、父として常に寄り添いたいと思いつつ、気付けば大幸キャンパスで27年過ごしていました。今、多くの卒業生達が立派な社会人として育った姿を見て、本当に教育者としての道を歩んだことを喜んでいきます。そしてその場を与えてくれた名古屋大学には「感謝、感謝……ただ感謝！」の気持ちで一杯です。



破竹の勢いの名古屋大学に乾杯！

杉原 正顕 大学院工学研究科

私は平成17年に東京大学に異動しましたが（平成25年にさらに青山学院大学に異動しました）、このたび名古屋大学から名誉教授の称号を拝受いたしました。名古屋大学の皆様のご高配に心より感謝いたします。

私は、平成9年、工学研究科の特徴である複合専攻の一つ、「計算理工学専攻」の設置のため、若輩ものではありましたが教授として呼んでいただきました。新しい専攻であるため、すべて新しく作っていく必要がありました。大変ではありましたが、教員一人一人が知恵を絞り、よい専攻をつくるという目標に丸となって邁進したのを思い出します。また、名大異動後すぐに、日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業理工領域「計算科学」分野において、専攻が主体となるプロジェクトが採択となり、すごいところに来たのだなと

思ったことも懐かしい思い出です。名大在籍は長くはありませんでしたが（実は、私にとっては長い方なのです）、多くの優秀な研究者や元気な学生諸君と出会い、楽しく、かつ、充実した日々をおくることができました。

現在は、名古屋大学を外から拝見する立場ですが、「研究大学強化促進事業」支援対象機関にトップ4で採択、「スーパーグローバル大学創成支援」に採択、あと、何と言っても、赤崎先生、天野先生のノーベル賞受賞、破竹の勢いの名古屋大学に乾杯！



名古屋大学での42年を振り返って

山本 一良 大学院工学研究科

1973年4月、工学部に採用されて以来42年間、名古屋大学にお世話になりました。助手15年、助教授7年、理事・副総長も含め教授20年です。その間、原子力化学工学、特に安定同位体分離の理論的・実験的仕事に携わり、皆様の助けをいただいで、従来の学問分野に存在した種々の困難を乗り越える新しい概念、理論的道具を作るなど、それなりの結果を出すことができました。本当にありがとうございました。

振り返りますと、42年間の前半と後半では、大学も大きく変わりました。前半では、「古き良き時代」と呼ばれるゆったりとした雰囲気の中で、教育も研究も進められており、ノーベル賞を受賞された、6人の名大ゆかりの先生方の仕事は、この環境の中で生み出されました。現在から考えると論文の生産性は低かったかもしれませんが、基礎的でスケールの大

きい息の長い研究に従事する心の余裕がありました。学生も大学院生も、これらの研究現場の中で、教員を含む諸先輩と「自由闊達に」意見を述べ合い、また、先輩たちの「凄さ」を実感できる「感（受）性」を備えていれば、先輩の背中を見て、教えなくても自然に自分のやり方を確立してきたのです。もっとも、「凄さ」を実感するためには、基礎学力が必須です。基礎教育はこのためにもきわめて重要です。今日の大学は極めて忙しくなりましたが、教育・研究の本質は変わらないと思います。

名古屋大学のますますの発展に期待します。



自由な学風と良き隣人に恵まれて

海老原 史樹文 大学院生命農学研究科

私が名古屋大学に入学した年は、学園紛争の真っただ中で、いわゆる過激派学生による教養部や本部の封鎖があった時でした。入学後も学生運動の嵐は治まるどころか勢いを増し、講義もまともに開かれない状態がしばらく続きました。そのため、学問に対する興味はほとんど失っていました。しかし、卒業研究で指導を受けた近藤恭司先生（故人）にお会いし、研究者としての途を目指すことになりました。

その後、助手として名古屋大学に職を得て35年、良き隣人に恵まれて実り多い教育・研究生活を送ることができました。教育面では、多くの学生を指導して社会へ送り出すことができたことが大きな喜びです。研究面では、黎明期にあった時間生物学に取り組み、この分野の発展に多少なりとも貢献できたことに満足しています。これも、スタッフの方々はもと

より、研究に参画してくれた学生諸君の努力のお陰であると感じています。

名古屋大学は、他の旧帝国大学と比べて歴史が浅いため、自由な気風があるといわれています。農学部においてもその気風は強く、研究面では職階に関係なく対等であるとの考えが伝統になっています。私にとってその考え方は有り難く、助手の時代、研究を進める上で大いに助かりました。教授になってからも、この伝統を引き継いで学生との壁をできるだけ低くして研究を続けてきました。将来もこの伝統を守って、さらに大きく発展することを期待したいと思います。



幸せな研究生活への感謝

神保 雅一 大学院情報科学研究科

2004年4月に名古屋大学大学院情報科学研究科に赴任して11年を名古屋大学で過ごさせていただきました。私は、若い時から情報科学と向き合って研究生活を送ってきましたが、いまでは考えられませんが、当時、学位もなく修士を修了したばかりの若僧を助手として雇ってもらい、恩師の國澤清典先生とは異なる離散数学の分野に足を踏み入れ、31、2歳まで論文がほとんどありませんでした。しかし、國澤先生や周囲の方が気長に見守ってくださったおかげで、大学に籍を置き続けて好きな研究を続けることができました。現在では、数年も論文を書かない若手は排除される仕組みになっていますが、古き良き時代が温かく私を研究の世界に残してくれたのだと感謝の念でいっぱいです。

私の研究は、情報科学や統計学を離散数学の観点から眺め

たものであり、その成果の多くは指導学生や周りの研究者とのdiscussionの上に乗ったものでした。私は自分の中にアイデアが生まれると周りの人に話したくてたまらない衝動に駆られます。人にアイデアを話して議論していると自己昇華が起り、理論がより鮮明に組織立ってくるのがわかります。また、他人の話がトリガーとなって、より広い視点にアイデアを広げられたこともありました。名古屋大学では、このような楽しい経験を多々させていただきました。

今後は、私が受けた良き時代や恩師からの恩を若い人に返せるよう人生を歩んで行ければと思っています。



なつかしき名古屋大学

西田 保 総合保健体育科学センター教授

人生の60%を過ごした名古屋大学。退職してまだひと月も経っていないのに「なつかしさ」を感じます。

名古屋大学での仕事は、私の新婚生活とともに始まるという大変印象深いものでした。学部生との授業では、ゴルフ、サッカー、バドミントン、テニスなどを担当しましたが、若い時も年を取ってから模範をきちっと示せるよう心がけました。大学院のゼミには、他大学出身の一般学生、一般企業の社会人、海外からの留学生、博士学位取得を目指した社会人が入学してくれました。多様なバックグラウンドを持つ院生たちとの交流は、私にとって非常に貴重な経験でした。彼らに感謝の気持ちで一杯です。

研究面では、スポーツ心理学を専門として、個人研究や共同研究を進めてきました。特に、生涯にわたる研究トピック

スであるスポーツ動機づけに関しては、科研費などの外部資金を背景に、自分の興味の湧くまま自由に研究させて頂きました。また、「スポーツ動機づけ研究会」を設立して、若い人たちとも研究交流を重ねました。そのときの熱い議論は、その後の研究を大いに推進させてくれたと確信しています。

名古屋大学で過ごした36年間の出来事。今も私の心に強く刻み込まれています。過去をなつかしむのは年を取った証拠かもしれませんが、他大学でセカンドライフをスタートさせた現在の私にとって、それらは貴重な財産となっています。

名大を表敬訪問された方々 [平成27年1月16日～4月15日]

| 日付 | 国/地域 | 訪問者 | 目的 |
|---------|---------|--|-----------------------------|
| 1月22日 | オーストラリア | メルボルン大学からリチャード・ジェームス学務担当副学長 | 表敬あいさつ及び高等教育研究センター招聘セミナーの講演 |
| 1月26日 | 英国 | 英国国際戦略研究所からマーク・フィッツパトリック核不拡散・軍縮プログラム部長 | 表敬あいさつ及び PhD 登龍門国際情勢講座講演 |
| 1月29日 | ウズベキスタン | ウズベキスタン共和国ハルシッド・ミルザヒドフ国家通信・情報化・通信技術委員会議長 | 表敬あいさつ |
| 2月7日～9日 | モンゴル | ロブサンニヤム・ガントゥムル モンゴル教育文化科学大臣 | 表敬あいさつ及び今後の学術交流に係る意見交換 |
| 2月10日 | メキシコ | グアナフアト大学からホセ・マニエル・セブレラ・シクト学長他2名 | 表敬あいさつ |
| 2月27日 | インド | インド科学教育研究大学からラビンドラ・ナス・ムカジ コルカタ校学長、ナラヤナサミ・サティアモルティー モハリ校学長、ビノド・クマール・シン ボーパール校学長、ラマクリシュナン・ビーラルバフー トリバンドラム校学長 | 表敬あいさつ及び理学研究科との意見交換 |
| 3月6日 | オーストラリア | 在大阪オーストラリア総領事館からキャサリン・パターソン領事 | 表敬あいさつ |
| 3月26日 | インドネシア | バジャジャラン大学からリナ・インディアアッチ副学長他2名 | 表敬あいさつ |
| 4月1日 | カナダ | マニトバ大学からステファニー・オルソン英語学国際プログラム/生涯教育ディレクター | 国際教育交流センター関係教員との意見交換 |
| 4月6日 | タイ | ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校からブラサート・ピンパトムラット学長、ソンマイ・ピューサアーツ副学長他1名 | 表敬あいさつ及び意見交換 |
| 4月14日 | 韓国 | 慶尚大学校から権淳基 総長他3名 | 表敬あいさつ |

新たに締結した学術交流協定 [平成27年1月16日～4月15日]

大学間学術交流協定

| 締結日 | 地域/国名 | 大学/研究機関名 |
|-------|---------|------------|
| 1月31日 | タイ | バンコク病院 |
| 2月23日 | カナダ | アルバータ大学 |
| 2月24日 | オーストラリア | 西オーストラリア大学 |

部局間学術交流協定

| 締結日 | 地域/国名 | 大学/研究機関名 | 部局名 |
|-------|---------|-------------------|------------|
| 1月30日 | タイ | タマサート大学経済学部 | 国際開発研究科 |
| 2月26日 | オーストラリア | アデレード大学健康科学部 | 医学部・医学系研究科 |
| 3月11日 | 国際機関 | 私法統一国際協会(ユニドロワ) | 法学部・法学研究科 |
| 3月13日 | インドネシア | ガジャマダ大学理学部 | 多元数理科学研究科 |
| 3月24日 | タイ | マヒドン大学アセアン健康開発研究所 | 医学部・医学系研究科 |

構成員を対象とした研修 [平成27年1月16日～4月15日]

| 実施日 | 研修名 | 目的 | 参加人数 |
|--|---|---|-------------------|
| 1月22日(木) 3月2日(月) 3月20日(金) | 第10回研究支援者セミナー 第11回研究支援者セミナー 第12回研究支援者セミナー | URA、コーディネーターや事務系職員等を対象に、研究支援業務において必要なノウハウ・スキルを研修する。 | 15名 22名 12名 |
| 1月24日(土) | 2015年後期第5回B人セミナー | 博士の持っている力を自覚し、またその力を活用できる業界、分野についての情報を得る。社会で必要とされるキャリアデザイン力・コミュニケーション能力・ロジカルシンキングの習得を中心とする。 | 34名 |
| 1月28日(水) | 第86回特許基礎セミナー | 特許制度の基礎や特許出願書類作成の流れを学ぶとともに、特許文献調査の実習を行うことで、教職員・研究者に必須の特許知識の向上を図る。 | 10名 |
| 2月9日(月) | 事務職員のための感染防止対策研修 | 附属病院の事務職員に院内感染防止対策及び健康管理等の知識を習得させることにより、院内感染防止策の推進等を図る。 | 29名 |
| 2月12日(木) | 第3回医療技術部放射線部門 マネジメント研修 | 放射線部門のスタッフが、本院の理念の下、組織の一員としての自覚と責任感を持ち、社会に貢献していくために必要な人間力を身につけることを目的とする。 | 37名 |
| 2月23日(月) | 国際教育交流業務に関する教職員研修 (第5回) 「グローバル化する大学の職員像」 | 専門的な知識や能力をもち、大学の更なる国際化を推進できる教職員の育成を目指す。 | 29名 |
| 3月6日(金) | 研究倫理についてのFD 「研究倫理と研究参加者の保護」 | 最近、問題になっている研究倫理について、特に研究倫理審査の具体的な手続きと基本的な観点について、教育発達科学研究科の研究倫理審査委員長にレクチャーしてもらい、討論した。 | 28名 |
| 3月6日(金) | ネットワーク・サーバ管理者のための情報 セキュリティ講習会 | ネットワーク・サーバ管理者(教職員、学生等) Linux サーバ | 19名 |
| 3月12日(木) | 第4回医療技術部放射線部門マネジメント 研修 | 放射線部門のスタッフが、附属病院の理念の下、組織の一員としての自覚と責任感を持ち、社会に貢献していくために必要な人間力を身につけることを目的とする。 | 48名 |
| 3月12日(木) 3月17日(火) 3月24日(火) 3月26日(木) | eラーニングシステム NUCT 利用講習会 | 授業・研修等の担当でこれから NUCT を利用される方を対象に、NUCT を理解し積極的に利用して頂くための講習会 | 10名 |
| 4月2日(木) ～10日(金) | 平成27年度新規採用職員研修 | 本学新規採用職員に対し、法人職員としての心構えを身につけると共に、社会人として必要な業務遂行上の基礎知識及び能力を養成する。 | 49名 |
| 4月2日(木) ～10日(金) | ハラスメント防止研修 | 構成員のハラスメント防止意識を高めるため | 約4,500名 (計28回) |
| 4月6日(月) 4月9日(木) | 平成27年度新規採用医療従事者医療安全・ 感染対策研修 | 附属病院に新規採用の医療従事者に院内の医療安全及び感染対策に関する基本ルールを周知徹底することにより、患者安全の確保を図る。 | 287名 |

新任役員等の紹介

●監事

熊田 一充
(くまだ かずみつ)



〈略歴〉

昭和50年10月 トヨタ自動車工業株式会社入社
昭和62年2月 トヨタ自動車株式会社欧州事務所課長
平成5年1月 同法規部次長
平成11年1月 同調達企画部主査(部長)
平成15年1月 同監査役室長
平成17年6月 トヨタファイナンス株式会社常勤監査役
平成19年6月 同常務取締役
平成23年7月 国立大学法人名古屋大学監事

●監事(非常勤)

浅野 良裕
(あさの よしひろ)



〈略歴〉

昭和50年10月 公認会計士浅野健一事務所入所
昭和57年10月 監査法人ユニー会計事務所入所
昭和63年4月 監査法人中央会計事務所(中央青山監査法人)入所
平成11年1月 浅野公認会計士事務所所長
平成14年7月 中央青山監査法人退社
平成21年4月 国立大学法人名古屋大学監事

●副理事(学術情報基盤・情報セキュリティ・全学同窓会担当)

伊藤 義人
(いとう よしと)



専門分野: 土木工学(構造工学、地震工学、維持管理工学)、
環境情報システム、耐震構造、衝撃工学

〈略歴〉

昭和52年4月 名古屋大学工学部助手
昭和63年10月 名古屋大学工学部助教授
平成7年4月 名古屋大学理工学総合研究センター教授
平成12年4月 名古屋大学附属図書館長
平成15年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成18年4月 名古屋大学経営協議会委員
平成21年4月 名古屋大学情報連携統括本部副本部長
平成21年4月 名古屋大学情報連携統括本部情報戦略室長
平成24年4月 名古屋大学情報基盤センター長
平成26年4月 名古屋大学教育研究評議員(連合2群選出)
平成27年4月 名古屋大学副理事
(学術情報基盤・情報セキュリティ・全学同窓会担当)

●副理事(国際関係担当)

磯田 文雄
(いそだ ふみお)



〈略歴〉

昭和52年4月 文部省採用
平成7年7月 文部省教育助成局海外子女教育課長
平成9年7月 学術国際局研究助成課長
平成11年7月 教育助成局地方課長
平成13年1月 科学技術・学術政策局政策課長
平成14年4月 大臣官房総括会計官
平成16年4月 国立大学法人筑波大学理事
平成18年4月 文部科学省大臣官房審議官
平成18年10月 文部科学省高等教育局私学部長
平成20年7月 文部科学省研究振興局長
平成22年7月 文部科学省高等教育局長
平成24年1月 国立大学法人東京大学理事
平成25年10月 文部科学省大臣官房付
平成26年3月 定年退職
平成26年8月 名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院長
平成26年9月 名古屋大学総長補佐(国際関係担当)
平成27年4月 名古屋大学副理事(国際関係担当)

新任役員等の紹介

●副理事（病院担当）

石黒 直樹
(いしぐろ なおき)



専門分野：整形外科学

〈略歴〉

昭和63年11月 名古屋大学医学部助手
平成7年4月 名古屋大学医学部附属病院講師
平成12年4月 名古屋大学大学院医学研究科助教授
平成13年12月 名古屋大学大学院医学研究科教授
平成14年4月 名古屋大学大学院医学系研究科教授
平成14年6月 名古屋大学医学部附属病院臨床治験管理センター部長
平成17年5月 名古屋大学医学部附属病院地域医療センター長
平成19年4月 名古屋大学医学部附属病院副院長
平成20年2月 名古屋大学医学部附属病院臨床研究推進センター部長
平成22年4月 名古屋大学医学部附属病院材料部長
平成25年4月 名古屋大学医学部附属病院長
平成25年4月 名古屋大学医学部附属病院先端医療・臨床研究支援センター長
平成25年7月 名古屋大学医学部附属病院メディカルITセンター長
平成27年4月 名古屋大学副理事（病院担当）

●副理事（男女共同参画担当）

東村 博子
(つかむら ひろこ)



専門分野：生殖科学

〈略歴〉

平成3年4月 米国カンサス大学医学センター博士研究員
平成3年10月 名古屋大学農学部助手
平成10年4月 名古屋大学農学部助教授
平成11年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科助教授
平成8年4月 名古屋大学総長補佐（男女共同参画担当）
平成16年2月 大学共同利用機関法人自然科学研究機構基礎生物学研究所客員助（准）教授（併任）
平成18年4月 名古屋大学男女共同参画室長
平成19年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科准教授
平成25年3月 名古屋大学大学院生命農学研究科教授
平成27年4月 名古屋大学副理事（男女共同参画担当）

●副理事（研究力強化担当）

藤巻 朗
(ふじまき あきら)



専門分野：電子工学、通信・ネットワーク工学、
超伝導デバイス工学

〈略歴〉

昭和63年4月 名古屋大学工学部助手
平成4年4月 名古屋大学工学部講師
平成6年1月 名古屋大学工学部助教授
平成9年4月 名古屋大学大学院工学研究科助教授
平成16年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成22年10月 名古屋大学総長補佐（総長調査戦略担当）
平成23年10月 名古屋大学総長補佐（総合企画調査担当）
平成24年4月 名古屋大学総長補佐（研究推進担当、総合企画調査担当）
平成24年5月 名古屋大学研究推進室長
平成25年4月 名古屋大学総長補佐（研究費不正使用防止担当、研究推進担当、総合企画調査担当）
平成26年1月 名古屋大学学術研究・産学官連携推進本部副本部長
平成27年4月 名古屋大学副理事（研究力強化担当）

●副理事（国際貢献担当）

岡田 亜弥
(おかだ あや)



専門分野：国際開発学、地域計画学

〈略歴〉

昭和58年4月 財団法人国際開発センター（IDCJ）
昭和64年1月 国連地域開発センター（UNCRD）国連研究フェロー
平成元年11月 国連児童基金（UNICEF）ニューヨーク本部
アシスタントプランニングオフィサー
平成4年3月 国連児童基金インド ラクナウ事務所
プロジェクトオフィサー
平成8年10月 インド国立都市問題研究所（NIUA）客員研究員
平成9年9月 米国マサチューセッツ工科大学（MIT）
産業パフォーマンスセンター研究フェロー
平成11年4月 名古屋大学大学院国際開発研究科助教授
平成17年7月 名古屋大学大学院国際開発研究科教授
平成23年12月 米国マサチューセッツ工科大学客員研究員
平成24年10月 インド ジャワハルラルネルー大学（JNU）客員教授
平成25年5月 名古屋大学総長補佐（総合企画調査担当）
平成27年4月 名古屋大学副理事（国際貢献担当）

新任部局長等の紹介

●大学院文学研究科長・文学部長

佐久間 淳一
(さくま じゅんいち)



専門分野：言語学
(略歴)

平成4年11月 名古屋大学文学部講師
平成8年5月 名古屋大学文学部助教授
平成12年4月 名古屋大学大学院文学研究科助教授
平成19年4月 名古屋大学大学院文学研究科准教授
平成20年4月 名古屋大学大学院文学研究科教授
平成22年4月 名古屋大学総長補佐(入試担当)
平成24年4月 名古屋大学大学院文学研究科副研究科長
平成25年4月 名古屋大学総長補佐(入試担当)
平成27年4月 名古屋大学大学院文学研究科長・文学部長

●大学院教育発達科学研究科長・教育学部長

氏家 達夫
(うじいえ たつお)



専門分野：パーソナリティ心理学領域
(略歴)

昭和58年4月 国立音楽大学講師
昭和62年4月 福島大学教育学部助教授
平成7年4月 福島大学生涯学習教育研究センター助教授
平成8年10月 福島大学生涯学習教育研究センター教授
平成13年3月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授
平成13年4月 名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター教授
平成18年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授
平成18年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成27年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科長・教育学部長

●情報文化学部長

黒田 達朗
(くろだ たつあき)



専門分野：都市・地域経済学、公共経済学
(略歴)

昭和60年10月 京都大学経済研究所助手
平成元年12月 豊橋技術科学大学工学部講師
平成3年10月 名古屋大学教養部助教授
平成5年7月 ハーバード大学客員研究員
平成5年10月 名古屋大学情報文化学部助教授
平成10年4月 名古屋大学情報文化学部教授
平成13年4月 名古屋大学大学院環境学研究科教授
平成14年4月 名古屋大学総長補佐(法人化(人事・労務)・新組織対応担当)
平成15年3月 ロンドン大学(LSE)客員研究員
平成16年4月 名古屋大学大学院環境学研究科長
平成27年4月 名古屋大学情報文化学部長

●大学院理学研究科長・理学部長

松本 邦弘
(まつもと くにひろ)



専門分野：分子生物学、細胞生物学
(略歴)

昭和52年12月 鳥取大学工学部助手
昭和60年3月 米国 DNAX 分子生物研究所主任研究員
平成2年6月 名古屋大学理学部教授
平成8年4月 名古屋大学大学院理学研究科教授
平成21年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成24年4月 名古屋大学大学院理学研究科副研究科長
平成25年4月 名古屋大学高等研究院副院長
平成27年4月 名古屋大学大学院理学研究科長・理学部長

●大学院工学研究科長・工学部長

新美 智秀
(にいみ ともひで)



専門分野：機械工学、流体工学
(略歴)

昭和54年4月 トヨタ自動車株式会社入社
昭和57年12月 同上退社
昭和58年1月 名古屋大学工学部助手
平成元年12月 名古屋大学工学部講師
平成2年8月 名古屋大学工学部助教授
平成9年4月 名古屋大学大学院工学研究科助教授
平成14年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成24年4月 名古屋大学大学院工学研究科副研究科長
平成25年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成26年4月 名古屋大学総長補佐(教育組織担当)
平成27年4月 名古屋大学大学院工学研究科長・工学部長

●大学院生命農学研究科長・農学部長

川北 一人
(かわきた かずひと)



専門分野：植物病理学
(略歴)

昭和61年4月 北里大学薬学部助手
平成2年4月 名古屋大学農学部助手
平成9年4月 名古屋大学農学部助教授
平成11年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科助教授
平成18年6月 名古屋大学大学院生命農学研究科教授
平成23年5月 名古屋大学生物機能開発利用研究センター長
平成25年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科副研究科長
平成25年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成27年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科長・農学部長

新任部局長等の紹介

●大学院環境学研究科長

神沢 博
(かみざわ ひろし)

専門分野：気象学
(略歴)

昭和56年7月 国立極地研究所助手
昭和59年7月 第26次南極地域観測隊員
平成5年10月 国立環境研究所地球環境研究センター研究管理官
平成10年4月 国立環境研究所大気圏環境部大気物理研究室長
平成13年4月 国立環境研究所大気圏環境領域大気物理研究室長
平成15年4月 名古屋大学大学院環境学研究科教授
平成18年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成18年4月 名古屋大学大学院環境学研究科副研究科長
平成27年4月 名古屋大学大学院環境学研究科長



●大学院情報科学研究科長

安田 孝美
(やすだ たかみ)

専門分野：社会情報学・メディア情報学
(略歴)

昭和62年4月 名古屋大学工学部助手
平成5年10月 名古屋大学情報文化学部助教授
平成15年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科教授
平成22年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科副研究科長
平成22年4月 名古屋大学大学院人間情報学研究科長
平成25年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成25年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科副研究科長
平成26年4月 名古屋大学大学院人間情報学研究科長
平成27年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科長



●教養教育院長

戸田山 和久
(とだやま かずひさ)

専門分野：科学哲学・科学技術社会論
(略歴)

平成元年7月 名古屋大学教養部講師
平成5年10月 名古屋大学情報文化学部助教授
平成10年4月 名古屋大学高等教育研究センター助教授
平成12年4月 名古屋大学情報文化学部助教授
平成15年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科教授
平成16年4月 名古屋大学総長補佐(社会連携・社会貢献担当)
平成16年4月 名古屋大学社会連携推進室長
平成17年1月 名古屋大学高等教育研究センター長
平成21年4月 名古屋大学総長補佐(教育担当)
平成22年4月 名古屋大学教養教育院副院長
平成24年4月 名古屋大学総長補佐(教員担当、評価担当)
平成27年4月 名古屋大学教養教育院長



●高等研究院長

篠原 久典
(しのはら ひさのり)

専門分野：ナノ物質科学
(略歴)

昭和54年10月 分子科学研究所助手
昭和56年4月 岡崎国立共同研究機構分子科学研究所助手
昭和63年9月 三重大学工学部助教授
平成5年4月 名古屋大学理学部教授
平成8年4月 名古屋大学大学院理学研究科教授
平成10年4月 名古屋大学物質科学国際研究センター教授
平成11年4月 名古屋大学大学院理学研究科教授
平成21年4月 名古屋大学大学院理学研究科副研究科長
平成24年4月 名古屋大学大学院理学研究科長
平成27年4月 名古屋大学高等研究院長



●太陽地球環境研究所長

町田 忍
(まちだしのぶ)

専門分野：磁気圏物理学
(略歴)

昭和57年4月 日本学術振興会特定領域奨励研究員
昭和59年10月 アイオワ大学物理天文学部 Research Investigator
昭和61年7月 アイオワ大学物理天文学部 Assistant Research Scientist
昭和63年3月 宇宙科学研究所助手
平成3年10月 宇宙科学研究所助教授
平成5年1月 京都大学理学部助教授
平成7年4月 京都大学大学院理学研究科助教授
平成12年4月 京都大学大学院理学研究科教授
平成25年4月 名古屋大学太陽地球環境研究所教授
平成27年4月 名古屋大学太陽地球環境研究所長



●エコトピア科学研究所長

興戸 正純
(おきど まさずみ)

専門分野：材料加工、表界面工学
(略歴)

昭和54年4月 名古屋大学工学部助手
昭和63年10月 名古屋大学工学部講師
平成5年4月 名古屋大学工学部助教授
平成7年4月 名古屋大学理工科学総合研究センター教授
平成14年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成24年4月 名古屋大学エコトピア科学研究所教授
平成25年4月 名古屋大学エコトピア科学研究所副所長
平成27年4月 名古屋大学エコトピア科学研究所長



新任部局長等の紹介

●附属図書館長

森 仁志
(もり ひとし)

専門分野：植物生理学
(略歴)

昭和62年4月 明治乳業(株) 研究員
平成元年3月 岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所助手
平成5年4月 名古屋大学農学部助教授
平成11年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科助教授
平成14年5月 名古屋大学大学院生命農学研究科教授
平成27年4月 名古屋大学附属図書館長



●心の発達支援研究実践センター長

金井 篤子
(かない あつこ)

専門分野：キャリア心理学
(略歴)

昭和56年4月 株式会社リクルート
平成6年8月 名古屋大学教育学部助手
平成8年4月 名古屋大学教育学部助教授
平成12年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授
平成14年10月 名古屋大学総長補佐(男女共同参画担当)
平成15年1月 名古屋大学男女共同参画室長
平成16年3月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授
平成22年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成27年4月 名古屋大学心の発達支援研究実践センター長



●生物機能開発利用研究センター長

中園 幹生
(なかぞの みきお)

専門分野：植物分子遺伝学
(略歴)

平成7年12月 東京大学農学部助手
平成8年4月 東京大学大学院農学生命科学研究科助手
平成15年3月 東京大学大学院農学生命科学研究科助教授
平成19年4月 東京大学大学院農学生命科学研究科准教授
平成22年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科教授
平成27年4月 名古屋大学生物機能開発利用研究センター長



●シンクロトン光研究センター長

曾田 一雄
(そだ かずお)

専門分野：物性物理学、放射光分光学
(略歴)

昭和57年4月 東京大学物性研究所助手
平成3年4月 大阪府立大学工学部講師
平成6年10月 名古屋大学工学部助教授
平成9年4月 名古屋大学大学院工学研究科助教授
平成11年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成27年4月 名古屋大学シンクロトン光研究センター長



●グリーンモビリティ連携研究センター長

森川 高行
(もりかわ たかゆき)

専門分野：交通計画、都市計画
(略歴)

昭和58年4月 京都大学工学部助手
平成3年4月 名古屋大学工学部助教授
平成9年4月 名古屋大学大学院工学研究科助教授
平成12年5月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成13年4月 名古屋大学大学院環境学研究科教授
平成18年4月 名古屋大学大学院環境学研究科附属交通・都市国際研究センター教授
平成22年4月 名古屋大学大学院環境学研究科教授
平成26年6月 名古屋大学未来社会創造機構人とモビリティ社会の研究開発センター教授
平成26年10月 名古屋大学グリーンモビリティ連携研究センター長



●脳とこころの研究センター長

長縄 慎二
(ながなわ しんじ)

専門分野：量子医学
(略歴)

昭和62年6月 袋井市立袋井市民病院研修医
昭和63年4月 名古屋大学医学部附属病院医員(研修医)
平成元年5月 名古屋大学医学部附属病院医員
平成元年7月 小牧市民病院医師
平成4年4月 名古屋大学医学部附属病院助手
平成4年10月 米国ミシガン州立大学放射線科客員研究員(Rotary 財団奨学生)
平成5年7月 名古屋大学医学部附属病院助手
平成6年1月 国立名古屋病院医師
平成8年4月 名古屋大学医学部附属病院助手
平成12年4月 名古屋大学大学院医学系研究科助手
平成13年1月 独国 マックスプランク認知神経科学研究所客員研究員(日独放射線医学交流協会奨学生)
平成14年4月 名古屋大学医学部附属病院講師
平成16年1月 名古屋大学大学院医学系研究科助教授
平成18年7月 名古屋大学大学院医学系研究科教授
平成27年4月 名古屋大学脳とこころの研究センター長



新任部局長等の紹介

●ナショナルコンポジットセンター長

佐宗 章弘
(さそう あきひろ)



専門分野：航空宇宙工学

〈略歴〉
平成元年4月 名古屋大学工学部助手
平成3年7月 東北大学流体科学研究所附属衝撃波工学研究センター助教授
平成10年4月 東北大学流体科学研究所附属衝撃波研究センター助教授
平成15年3月 東北大学流体科学研究所附属衝撃波研究センター教授
平成15年4月 東北大学流体科学研究所附属流体融合研究センター教授
平成18年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成26年4月 名古屋大学大学院工学研究科副研究科長
平成27年4月 名古屋大学ナショナルコンポジットセンター長

●企画部長

松浦 重和
(まつうら しげかず)



〈略歴〉
平成7年4月 科学技術庁長官官房秘書課
平成7年4月 科学技術庁原子力局政策課
平成8年4月 科学技術庁原子力局核燃料課
平成10年7月 科学技術庁長官官房総務課行政改革推進室専門職
平成13年1月 文部科学省大臣官房政策課行政改革推進室専門職
平成13年3月 ハーバード大学ケネディ行政大学院客員研究員
平成14年4月 文部科学省研究開発局宇宙開発利用課課長補佐
平成17年7月 在英国日本国大使館一等書記官
平成20年7月 文部科学省研究振興局振興企画課課長補佐
平成21年8月 文部科学省研究開発局宇宙開発利用課宇宙利用推進室長
平成23年4月 文部科学省研究開発局原子力損害賠償対策室次長
平成24年12月 文部科学大臣秘書官事務取扱
平成26年8月 名古屋大学総合企画室教授
平成27年4月 名古屋大学総合企画室教授 兼 企画部長

●教育推進部長

三枝 広人
(さいぐさ ひろひと)



〈略歴〉
昭和56年4月 東京学芸大学教育学部
昭和62年4月 放送教育開発センター管理部会計課
平成元年10月 文部省高等教育局医学教育課
平成5年4月 文部省高等教育局医学教育課大学病院指導室病院第二係主任
平成6年4月 文部省高等教育局企画課専門職員
平成8年4月 文部省高等教育局企画課大学設置調査係長
平成9年4月 放送大学学園総務部総務課課長補佐
平成12年4月 東京大学医学部附属病院医事課長
平成14年11月 文部科学省高等教育局留学生課課長補佐
平成16年4月 文部科学省高等教育局学生支援課課長補佐
平成18年4月 文部科学省高等教育局医学教育課課長補佐
平成20年9月 文部科学省大臣官房国際課専門官
平成21年6月 外務省在ニューヨーク日本国総領事館領事
平成24年8月 文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室海外協力官
平成25年4月 名古屋大学国際部長
平成27年4月 名古屋大学教育推進部長

●教育推進部教育監

高下 一磨
(たかした かずま)



〈略歴〉
昭和54年4月 名古屋大学医学部附属病院医事課
昭和60年7月 名古屋大学医学部附属病院総務課
平成2年5月 名古屋大学庶務部人事課
平成6年4月 名古屋大学庶務部人事課第二任用掛主任
平成6年12月 名古屋大学庶務部人事課第一任用掛主任
平成8年4月 岡崎国立共同研究機構総務部人事課給与係長
平成11年4月 名古屋大学総務部人事課第二給与掛長
平成14年4月 名古屋大学総務部人事課第二任用掛長
平成15年4月 名古屋大学総務部人事課職員掛長
平成16年4月 名古屋大学総務企画部人事労務課総務掛長
平成17年10月 名古屋大学総務企画部人事労務課専門員
平成18年4月 名古屋大学総合企画室専門員
平成19年4月 名古屋大学総務部人事労務課課長補佐
平成21年4月 名古屋大学学務部学務企画課教養教育院事務主幹(教養教育院事務室長)
平成24年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科事務部次長
平成27年4月 名古屋大学教育推進部教育監

●情報推進部長

山崎 信広
(やまさき のぶひろ)



〈略歴〉
昭和51年4月 九州大学大型計算機センター
昭和54年4月 九州大学工学部
平成4年4月 九州大学大型計算機センター
平成5年7月 九州大学大型計算機センターシステム管理掛システム管理主任
平成8年4月 九州大学大型計算機センターシステム運用掛システム運用主任
平成8年11月 学術情報センター事業部ネットワーク課ネットワーク管理掛長
平成12年4月 九州大学情報基盤センターネットワーク管理掛長
平成15年4月 大分医科大学教務部図書課長
平成15年10月 大分大学総務部学術情報課長
平成17年4月 大分大学研究・社会連携部学術情報課長
平成18年4月 鳥取大学学術情報部情報企画推進課長
平成20年4月 熊本大学学術情報部情報企画課長
平成22年4月 九州大学情報システム部情報企画課長
平成27年4月 名古屋大学情報推進部長

●文系事務部長

斉藤 肇
(さいとう はじめ)



〈略歴〉
昭和55年6月 岐阜工業高等専門学校会計課
平成元年4月 名古屋大学医学部附属病院医事課
平成3年5月 名古屋大学医学部附属病院管理課
平成6年4月 核融合科学研究所管理部会計課契約係主任
平成9年4月 名古屋大学経理部経理課共済組合掛主任
平成10年4月 浜松医科大学総務部会計課監査係長
平成13年4月 名古屋大学医学部管理課医療器材掛長
平成15年4月 名古屋大学経理部主計課監査掛長
平成16年4月 名古屋大学財務部財務課監査掛長
平成17年4月 名古屋大学財務部財務課専門員
平成18年4月 名古屋大学監査室専門員
平成21年4月 名古屋大学工学部・工学研究科経理課課長補佐
平成22年4月 名古屋大学監査室主幹
平成24年8月 名古屋大学理学部・理学研究科・多元数理科学研究科事務長
平成27年4月 名古屋大学文系事務部長

新任部局長等の紹介

●医学部・医学系研究科事務部長

吉田 勇人
(よしだ はやと)



〈略歴〉
 平成元年4月 北海道大学庶務部人事課
 平成3年10月 文部省高等教育局企画課
 平成7年7月 文部省高等教育局大学課大学改革推進室
 平成9年7月 文部省高等教育局大学課国立大学第二係主任
 平成10年10月 文部省高等教育局企画課研修交流係長
 平成13年1月 文部科学省高等教育局高等教育企画課企画係長
 平成13年4月 文部科学省高等教育局専門教育課教育大学室教員養成係長
 平成15年4月 放送大学総務部総務課課長補佐
 平成18年4月 大学評価・学位授与機構評価事業部企画調整課長
 平成20年4月 国立文化財機構東京国立博物館総務部総務課長
 平成22年4月 北海道大学総務部総務課長
 平成23年4月 北海道大学総務企画部総務課長
 平成24年4月 文部科学省高等教育局国立大学法人支援課国立大学戦略室室長補佐
 平成26年4月 文部科学省高等教育局国立大学法人支援課課長補佐
 平成27年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科事務部長

●工学部・工学研究科事務部長

大矢 淳一
(おおや じゅんいち)



〈略歴〉
 昭和55年4月 豊橋技術科学大学庶務課
 昭和56年4月 豊橋技術科学大学総務部庶務課
 昭和61年6月 豊橋技術科学大学総務部会計課
 昭和62年5月 名古屋大学医療技術短期大学部
 昭和64年1月 名古屋大学経理部情報処理課
 平成7年4月 名古屋大学庶務部人事課能率掛主任
 平成8年4月 名古屋大学庶務部人事課第二給与掛主任
 平成9年4月 名古屋大学経理部情報処理課専門職員
 平成14年4月 名古屋大学経理部情報処理課情報企画掛長
 平成16年4月 名古屋大学財務部情報企画課情報企画掛長
 平成17年4月 名古屋大学財務部財務課専門員
 平成18年4月 名古屋大学総合企画室専門員
 平成19年4月 名古屋大学総合企画室主幹
 平成23年7月 名古屋大学総務部職員課長
 平成26年4月 名古屋大学総務部総務課長
 平成27年4月 名古屋大学工学部・工学研究科事務部長

●附属図書館事務部長

大西 直樹
(おおにし なおき)



〈略歴〉
 昭和57年4月 東京大学附属図書館整理課
 昭和62年4月 学術情報センター管理部システムデータベース課
 平成4年4月 学術情報センター事業部データベース課データベース管理係長
 平成5年4月 大阪大学附属図書館情報管理システム管理掛長
 平成9年4月 大阪大学附属図書館情報サービス課参考調査掛長
 平成12年4月 大阪大学附属図書館情報管理課洋書目録情報掛長
 平成15年4月 大阪大学附属図書館情報サービス課図書館専門員
 平成19年4月 大阪大学附属図書館利用支援課課長補佐
 平成20年4月 滋賀医科大学図書館課長
 平成23年4月 京都大学附属図書館情報管理課長
 平成24年4月 京都大学附属図書館総務課長
 平成25年4月 京都大学附属図書館副事務部長・京都大学本部構内（文系）共通事務部図書担当課長
 平成26年4月 京都大学附属図書館副事務部長
 平成27年4月 名古屋大学附属図書館事務部長

資料

役員等

| | |
|-----------------------------|-------------|
| 総長 | 松尾 清一 |
| 理事（研究・学生担当）・副総長 | 國枝 秀世 |
| 理事（国際・広報担当）・副総長 | 渡辺 芳人 |
| 理事（総務・教育・組織改革・学術情報基盤担当）・副総長 | 松下 裕秀 |
| 理事（法務・人権・リスク管理・内部統制担当）・副総長 | 市橋 克哉 |
| 理事（財務・施設整備担当）・副総長 | 木村 彰吾 |
| 理事（人事労務・環境安全・事務総括担当）・事務局長 | 竹下 典行 |
| 理事（大学運営担当） | 郷 通子 (学外)† |
| 監事 | 熊田 一充 (学外) |
| 監事 | 浅野 良裕 (学外)† |
| 副総長（学術研究・産学官担当） | 財満 鎮明 |
| 副総長（評価・総合企画担当） | 前島 正義 |
| 副総長（入試・組織改革・学生支援・図書館担当） | 木俣 元一 |

| | |
|------------------------------|--------------------|
| 副理事（学術情報基盤・情報セキュリティ・全学同窓会担当） | 伊藤 義人 |
| 副理事（国際関係担当） | 磯田 文雄 |
| 副理事（病院担当） | 石黒 直樹 |
| 副理事（男女共同参画担当） | 東村 博子 |
| 副理事（研究力強化担当） | 藤巻 朗 |
| 副理事（国際貢献担当） | 岡田 亜弥 |
| 参与 | 山田 直 (学外)† |
| 参与 | 伊藤 勝基 (学外)† |
| 参与 | 小川 宏嗣 (学外)† |
| 参与 | 房村 精一 (学外)† |
| 参与 | 徳川 義崇 (学外)† |
| 参与 | Giles Clarke (学外)† |
| 参与 | 鮎京 正訓 (学外)† |
| 参与 | 山本 一良 (学外)† |

†印は非常勤

経営協議会委員

| 学外委員 | |
|---------------------|-------|
| トヨタ自動車株式会社代表取締役会長 | 内山田竹志 |
| 中部電力株式会社相談役 | 川口 文夫 |
| 国立病院機構名古屋医療センター名誉院長 | 齋藤 英彦 |
| 株式会社中日新聞社相談役 | 坂井 克彦 |
| 日本ガイシ株式会社相談役 | 柴田 昌治 |
| 丹羽連絡事務所代表 | 丹羽宇一郎 |
| 日本アイ・ピー・エム株式会社副会長 | 橋本 孝之 |
| 東海旅客鉄道株式会社特別顧問 | 松本 正之 |

(五十音順)

学内委員

| | |
|----------|-------|
| 総長 | 松尾 清一 |
| 理事 | 國枝 秀世 |
| 理事 | 渡辺 芳人 |
| 理事 | 松下 裕秀 |
| 理事 | 木村 彰吾 |
| 理事 | 竹下 典行 |
| 医学部附属病院長 | 石黒 直樹 |

教育研究評議会評議員

| | |
|------------|-------|
| 総長 | 松尾 清一 |
| 理事 | 國枝 秀世 |
| 理事 | 松下 裕秀 |
| 理事 | 市橋 克哉 |
| 文学研究科長 | 佐久間淳一 |
| 教育発達科学研究科長 | 氏家 達夫 |
| 法学研究科長 | 神保 文夫 |
| 経済学研究科長 | 根本 二郎 |
| 情報文化学部長 | 黒田 達朗 |
| 理学研究科長 | 松本 邦弘 |
| 医学系研究科長 | 高橋 雅英 |
| 工学研究科長 | 新美 智秀 |
| 生命農学研究科長 | 川北 一人 |
| 国際開発研究科長 | 伊東 早苗 |

| | |
|---------------|-------|
| 多元数理科学研究科長 | 菅野 浩明 |
| 国際言語文化研究科長 | 福田 真人 |
| 環境学研究科長 | 神沢 博 |
| 情報科学研究科長 | 安田 孝美 |
| 創薬科学研究科長 | 人見 清隆 |
| 環境医学研究所長 | 澤田 誠 |
| 太陽地球環境研究所長 | 町田 忍 |
| エコトピア科学研究科長 | 興戸 正純 |
| 附属図書館長 | 森 仁志 |
| 医学部附属病院長 | 石黒 直樹 |
| 総合保健体育科学センター長 | 押田 芳治 |
| 文学研究科 | 齋藤 文俊 |
| 教育発達科学研究科 | 森田美弥子 |
| 法学研究科 | 愛敬 浩二 |

| | |
|--------------|-------|
| 経済学研究科 | 野口 晃弘 |
| 理学研究科 | 杉山 直 |
| 医学系研究科 | 小嶋 哲人 |
| 工学研究科 | 佐宗 章弘 |
| 生命農学研究科 | 下村 吉治 |
| 国際開発研究科 | 梅村 哲夫 |
| 多元数理科学研究科 | 納谷 信 |
| 国際言語文化研究科 | 長畑 明利 |
| 環境学研究科 | 田中 重好 |
| 情報科学研究科 | 村瀬 洋 |
| 創薬科学研究科 | 北村 雅人 |
| 教育研究共同施設連合選出 | 町田 健 |
| 教育研究共同施設連合選出 | 伊藤 義人 |

総長補佐

| | |
|----------------|-------|
| 研究推進担当 | 一村 信吾 |
| 研究推進担当 | 門松 健治 |
| 研究推進担当 | 田中健太郎 |
| 国際化推進担当 | 土井 康裕 |
| コンソーシアム・国際広報担当 | 岩城 奈巳 |
| 教育担当、評価担当 | 戸田山和久 |
| 教育組織改革担当 | 高田 広章 |
| 教育組織改革担当 | 上原 早苗 |

| | |
|-------------------|-------|
| 教育組織改革担当、総合企画調査担当 | 松浦 重和 |
| 人権担当 | 福澤 直樹 |
| 人権（苦情処理）担当 | 渡部美由紀 |
| 施設整備担当 | 奥宮 正哉 |
| 災害対策担当 | 鈴木 康弘 |
| 労働安全担当 | 村田 静昭 |
| 研究・教育支援担当 | 松浦 年郎 |
| 産学官連携担当 | 水野 正明 |

| | |
|-------------|-------|
| 産学官連携担当 | 廣明 秀一 |
| 産学官連携担当 | 石川 隆司 |
| 社会連携・社会貢献担当 | 宇澤 達 |
| 評価担当 | 植村 和正 |
| 総合企画調査担当 | 大屋 雄裕 |
| 入試担当 | 納谷 信 |

部局長等

| 本部 | | |
|-------|-----------|-------|
| 事務局 | 事務局長 | 竹下 典行 |
| | 総務部 | 堀内 敦 |
| 総務部 | 総務部長 | 市川 真康 |
| | 総務課長 | 福地 克美 |
| | 広報渉外課長 | 廣川 光之 |
| | 渉外主幹 | 原 盛将 |
| | 人事課長 | 上野 哲也 |
| | 人事主幹 | 伊藤 秀樹 |
| | 職員課長 | 伊藤 秀樹 |
| 企画部 | 企画部長 | 松浦 重和 |
| | 企画課長 | 渡邊 千夏 |
| | 計画・評価主幹 | 武藤 英幸 |
| | 財務部 | 坂口 広志 |
| 財務部 | 財務部長 | 服部 樹理 |
| | 財務課長 | 岡部 衛 |
| | 財務調整主幹 | 村手 隆司 |
| | 経理・資産管理課長 | 佐田 隆昭 |
| | 契約課長 | 三枝 広人 |
| 教育推進部 | 教育推進部長 | 高下 一磨 |
| | 教育監 | 河合 泰和 |
| | 基盤運営課長 | 前原 義久 |
| | 事業推進課長 | 篠原 量紗 |
| | 国際主幹 | 鎌澤かおり |
| | 事業推進主幹 | |
| | | |

| | | |
|--------|-----------------|-------|
| 教育推進部 | 教育企画課長 | 室屋 守男 |
| | 共通教育推進主幹 | 今枝 明光 |
| | 学生交流課長 | 浅野 国裕 |
| | 学生支援課長 | 大脇申子男 |
| | 入試課長 | 橘 幹宏 |
| 研究協力部 | 国際入試主幹 | 小崎 光芳 |
| | 研究協力部長 | 塩原 耕次 |
| | 研究協力部次長（社会連携課長） | 加藤 滋 |
| | 研究支援課長 | 新地 博 |
| 施設管理部 | 施設管理部長 | 小松 幸雄 |
| | 施設企画課長 | 松田 賢 |
| | 施設整備課長 | 青木 浩史 |
| | 施設管理課長 | 袴田 満明 |
| | 環境安全支援課長 | 岩佐 智 |
| 運営支援組織 | 学術研究・産学官連携推進本部長 | 財満 鎮明 |
| | 国際教育交流本部長 | 渡辺 芳人 |
| | 情報連携統括本部長 | 松下 裕秀 |
| | 情報推進部長 | 山崎 信広 |
| | 情報推進課長 | 古橋 悟志 |
| | 情報基盤課長 | 服部 昌祐 |
| | 環境安全衛生推進本部長 | 竹下 典行 |
| | 防災推進本部長 | 竹下 典行 |
| | 施設・環境計画推進室長 | 奥宮 正哉 |

| | | | | | | |
|----------------------|--------------------------|---------------|---------------------|-------------------------|---------------------|-------------------|
| 運営支援組織 | 核燃料管理施設長 | 榎田 洋一 | 工学研究科・工学部 | 社会連携主幹 | 武内 松二 | |
| | 評価企画室長 | 前島 正義 | | 経理課長 | 澤村 明都 | |
| | ハラスメント相談センター長 | 石黒 洋 | | 教務課長 | 宮崎 洋介 | |
| | 社会連携推進室長 | 宇澤 達 | | 生命農学研究科・農学部 | 生命農学研究科長・農学部長 | 川北 一人 |
| | 災害対策室長 | 飛田 潤 | | | 附属フィールド科学教育研究センター長 | 戸丸 信弘 |
| | 男女共同参画室長 | 東村 博子 | | | 附属鳥類バイオサイエンス研究センター長 | 松田 洋一 |
| | 法務室長 | 市橋 克哉 | | | 農学部・生命農学研究科事務長 | 松岡真一郎 |
| | リスク管理室長 | 市橋 克哉 | | 国際開発研究科 | 国際開発研究科長 | 伊東 真苗 |
| | 総合企画室長 | 前島 正義 | | | 多元数理科学研究科 | 多元数理科学研究科長 |
| | PhD登龍門推進室長 | 前島 正義 | | 国際言語文化研究科 | 国際言語文化研究科長 | 福田 真人 |
| | 動物実験支援センター長 | 國枝 秀世 | | | 附属グローバルメディア研究センター長 | 中村登志哉 |
| | 大学文書資料室長 | 竹下 典行 | | 環境学研究科 | 環境学研究科長 | 神沢 博 |
| | 入試調査企画室長 | 木俣 元一 | | | 附属地震火山研究センター長 | 古本 宗充 |
| | 監査室 | 監査室長 | | | 市橋 克哉 | 附属持続的共発展教育研究センター長 |
| 監査室主幹 | | 林 正康 | 環境学研究科事務長 | | 引字 勝美 | |
| 教養教育院 | | 教養教育院長 | 戸田山和久 | 情報科学研究科 | 情報科学研究科長 | 安田 孝美 |
| | 高等研究院 | 高等研究院長 | 附属組込みシステム研究センター長 | | 高田 広章 | |
| トランスフォーメティブ生命分子研究所 | トランスフォーメティブ生命分子研究所長 | 伊丹健一郎 | 創薬科学研究科 | 創薬科学研究科長 | 人見 清隆 | |
| アジアサテライトキャンパス学院 | アジアサテライトキャンパス学院長 | 磯田 文雄 | | 創薬科学研究科・細胞生理学研究センター事務主幹 | 近藤 正仁 | |
| 文学研究科・文学部 | 文学研究科長・文学部長 | 佐久間淳一 | 環境医学研究所 | 環境医学研究所長 | 澤田 誠 | |
| | 附属「アジアの中の日本文化」研究センター長 | 藤木 秀朗 | | 附属次世代創薬研究センター長 | 澤田 誠 | |
| 教育発達科学 研究科・教育学部 | 教育発達科学研究所長・教育学部長 | 阿部 泰郎 | 太陽地球環境 研究所 | 太陽地球環境研究所長 | 町田 忍 | |
| | 附属中学校長 | 植田 健男 | | 附属ジオスペース研究センター長 | 平原 聖文 | |
| | 附属高等学校長 | 植田 健男 | エコトピア科学 研究所 | エコトピア科学研究所長 | 興戸 正純 | |
| 法学研究科・法学部 | 法学研究科長・法学部長 | 神保 文夫 | | 附属高度計測技術実践センター長 | 岩田 聡 | |
| | 附属法情報研究センター長 | 増田 知子 | | 研究所事務部 | 事務部長 | 長尾 義則 |
| 経済学研究科・経済学部 | 経済学研究科長・経済学部長 | 根本 二郎 | 総務課長 | | 坪井 直志 | |
| | 附属国際経済政策研究センター長 | 山田 基成 | 経理課長 | | 坂口 敏弘 | |
| 文系事務部 | 事務部長 | 斉藤 肇 | 附属図書館 | 附属図書館長 | 森 仁志 | |
| | 総務課長 | 高田 義雅 | | 医学部分館長 | 濱嶋 信之 | |
| | 経理課長 | 市岡 浩之 | | 研究開発室長 | 森 仁志 | |
| | 教務課長 | 中濱 定美 | | 事務部長 | 大西 直樹 | |
| 情報文化学部 | 情報文化学部長 | 黒田 達朗 | 情報管理課長 | 竹谷喜美江 | | |
| | 情報文化学部・情報科学研究科事務長 | 合田由美子 | 情報サービス課長 | 次良丸 章 | | |
| 理学研究科・理学部 | 理学研究科長・理学部長 | 松本 邦弘 | 情報システム課長 (事務取扱) | 大西 直樹 | | |
| | 附属臨海実験所長 | 澤田 均 | 情報システム課長 (事務取扱) | 大西 直樹 | | |
| | 附属南半球宇宙観測研究センター長 | 福井 康雄 | 地球水循環研究センター長 | 石坂 義二 | | |
| | 附属構造生物学研究センター長 | 本間 道夫 | 情報基盤センター長 | 伊藤 義人 | | |
| | 附属タウ・レプトン物理研究センター長 | 原田 正康 | アイソトープ総合センター長 | 本間 道夫 | | |
| | 理学部・理学研究科・多元数理科学研究科事務長 | 齋藤 勝行 | 遺伝子実験施設長 | 木下 俊則 | | |
| | 医学系研究科・医学部 | 医学系研究科長・医学部長 | 高橋 雅英 | 物質科学国際研究センター長 | 阿波賀邦夫 | |
| 附属医学教育研究支援センター長 | | 門松 健治 | 高等教育研究センター長 | 水谷 法美 | | |
| 附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター長 | | 高橋 隆 | 農学国際教育協力研究センター長 | 山内 章 | | |
| 医学部附属病院長 | | 石黒 直樹 | 年代測定総合研究センター長 | 榎並 正樹 | | |
| 医学部・医学系研究科事務部長 | | 吉田 勇人 | 博物館長 | 大路 樹生 | | |
| 事務部次長 | | 永家 清考 | 心の発達支援研究実践センター長 | 金井 篤子 | | |
| 総務課長 | | 仲井 精一 | 法政国際教育協力研究センター長 | 小畑 郁 | | |
| 人事労務主幹 | | 鎌澤 幸彦 | 生物機能開発利用研究センター長 | 中園 幹生 | | |
| 大幸地区事務統括課長 | | 棚瀬 隆夫 | シンクロトロン光研究センター長 | 曾田 一雄 | | |
| 学務課長 | | 内出 裕之 | 基礎理論研究センター長 | 野尻 伸一 | | |
| 経営企画課長 | | 安田 浩明 | 現象解析研究センター長 | 飯嶋 徹 | | |
| 経理課長 | | 堂前 弘樹 | グリーンモビリティ連携研究センター長 | 森川 高行 | | |
| 施設管理主幹 | | 佐野 立明 | 減災連携研究センター長 | 福和 伸夫 | | |
| 医事課長 | | 金永 博行 | 細胞生理学研究センター長 | 廣明 秀一 | | |
| 医療業務支援課長 | 坪井 信治 | 脳とこころの研究センター長 | 長縄 慎二 | | | |
| 工学研究科・工学部 | 工学研究科長・工学部長 | 新美 智秀 | ナショナルコンポジットセンター長 | 佐宗 章弘 | | |
| | 附属プラズマナノ工学研究センター長 | 大野 哲靖 | 学生相談総合センター長 | 植田 健男 | | |
| | 附属材料バックキャストテクノロジー研究センター長 | 浅野 秀文 | 総合保健体育科学センター長 | 押田 芳治 | | |
| | 附属計算科学連携教育研究センター長 | 白石 賢二 | 未来社会創造機構長 | 財満 鎮明 | | |
| | 附属マイクロ・ナノメカトロニクス研究センター長 | 新井 史人 | 人とモビリティ社会の研究開発センター長 | 小野木克明 | | |
| | 工学部・工学研究科事務部長 | 大矢 淳一 | 社会イノベーションデザイン学センター長 | 齋藤 永宏 | | |
| 総務課長 | 塚崎 一彦 | 素粒子宇宙起源研究機構 | 素粒子宇宙起源研究機構長 | 益川 敏英 | | |
| | | | 全学技術センター | 全学技術センター長 | 竹下 典行 | |

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成27年3月16日～4月15日]

| 記事 | 月日 | 新聞等名 |
|--|----------------------------------|----------------------------------|
| 1 日本学士院賞：東京大学教授近藤 豊氏元太陽地球環境研究所教授 | 3.16 (月) | 日刊工業 |
| 2 本学は天野 浩工学研究科教授に名古屋大学特別教授の称号を授与し、同教授からはノーベル賞メダルのレプリカが寄贈された | 3.16 (月) | 中日 (夕刊) 他2社 |
| 3 本学に建設予定の施設に株式会社東海メディカルプロダクツ会長筒井宣政氏が茶室を寄贈し次女佳美さんの戒名から「白蓮庵」と名づけ「佳美もたしなんだ茶道を通じて、海外からの留学生が日本の素晴らしさに触れてくれれば」と語る | 3.16 (月) | 中日 (夕刊) |
| 4 産業春秋：赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授の研究に取り組む姿勢が取り上げられる | 3.17 (火) | 日刊工業 |
| 5 本学が臨床研究の国際倫理指針づくりに乗り出し、森際康友法学研究科教授は「安全で効果的な医療を築くには、そこに至る過程も安全で効果的でなくてはならない。グローバルな視点で提言をまとめたい」と語る | 3.17 (火) | 朝日 (朝刊) |
| 6 本学と愛知県が協定を結び、障害者の医療に携わる医師を育成する分野で連携 | 3.17 (火) 3.25 (水) | 中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) |
| 7 シンクロトロン光研究センター長に曾田一雄工学研究科教授を選出 | 3.17 (火) | 中日 (朝刊) |
| 8 第30回博物館企画展「めだかの学校ーメダカ先生 (山本時男) と名古屋大学のメダカ研究ー」特別講演会「宇宙を旅した日本のメダカ」開催：25日 東京大学名誉教授井尻憲一氏が講演 | 3.17 (火) | 中日 (朝刊) |
| 9 医人伝：認定遺伝カウンセラー 大瀬戸久美子医学部附属病院技術補佐員が医学部附属病院で相談を行っている | 3.17 (火) | 中日 (朝刊) |
| 10 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授がノーベル賞メダルのレプリカを名城大学に寄贈 | 3.17 (火) 3.19 (木) | 読売 他4社 日刊工業 |
| 11 「ノーベル・プライズ・ダイアログ・東京2015」開催：1日 天野 浩工学研究科教授が講演しLEDの技術を医療分野に広げる研究を進める計画を明らかにした | 3.18 (水) | 読売 |
| 12 レーザー：窒化ガリの理由 カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授中村修二氏が「応物学会の窒化ガリウムの発表会場は、赤崎 勇先生が座長で天野 浩先生が聴衆。それくらい少なかった」と語る | 3.18 (水) | 日刊工業 |
| 13 森川高行未来社会創造機構教授は名古屋駅周辺まちづくり推進懇談会に出席し「徹底的に乗り換えの利便性を高めることが必要」と語る | 3.18 (水) | 読売 |
| 14 博物館スポット展示「海藻コレクションー津波にさらわれた8万点の標本」開催：10日～28日 | 3.18 (水) 3.25 (水) | 朝日 (夕刊) 朝日 (夕刊) |
| 15 福井康雄理学研究科教授は観測していた巨大星について、誕生後、最も初期の段階にあることがわかったと発表 | 3.19 (木) 3.20 (金) | 読売 朝日 (朝刊) 中日 (朝刊) |
| 16 厚生労働省は2月に実施した医師国家試験に8,258人が合格し、本学の合格率は92.4%だった | 3.19 (木) | 中日 (朝刊) |
| 17 レーザー：主体性引き出せ 天野 浩工学研究科教授 | 3.20 (金) | 日刊工業 |
| 18 赤崎 勇本学特別教授が豊田合成株式会社の本社を訪ねノーベル賞メダルのレプリカを寄贈 | 3.21 (土) 3.24 (火) | 読売 他3社 日刊工業 |
| 19 本学が株式会社東芝と共同で、福島第一原子力発電所2号機原子炉内部の宇宙線ミュオン粒子による透視に成功 | 3.21 (土) 3.22 (日) 3.23 (月) | 毎日 (朝刊) 読売 中日 (朝刊) 日刊工業 |
| 22 第4回科学の甲子園全国大会シンポジウム開催：天野 浩工学研究科教授が「世界の研究者と話すには、論理的に考えることが大事。実験では教科書に書いてないことがよく起きるが、それが楽しい」と語る | 3.21 (土) 3.23 (月) | 中日 (朝刊) 中日 (朝刊) |
| 23 戦後70年：愛知・豊川 太陽地球環境研究所豊川分室である土地の一部を公園化する計画がすすめられている | 3.22 (日) | 朝日 (朝刊) |
| 24 この人：「昭和陸軍全史」を完成させた日本福祉大教授川田 稔本学名誉教授 | 3.22 (日) | 中日 (朝刊) |
| 25 創論：脱時間給は能力を引き出すか 丹羽宇一郎本学名誉博士 | 3.22 (日) | 日経 (朝刊) |
| 26 藤原慎一博物館助教は岐阜県博物館の河部壮一郎学芸員が北海道で発見し世界最古の化石と分かった海生哺乳類「パレオパラドキシア」の復元図を同学芸員と作製 | 3.23 (月) | 中日 (朝刊) |
| 27 日本真空工業会創立30周年記念特別基調講演開催：9月9日 天野 浩工学研究科教授が講演 | 3.23 (月) | 日刊工業 |
| 28 広角：①イノベーション創出 トヨタ自動車株式会社会長内山田竹志氏本学卒業生 | 3.23 (月) | 日刊工業 |
| 29 本学や富士フィルムホールディングス株式会社などによる産学コンソーシアムはミャンマーなどの発展途上の東南アジア諸国で内視鏡を使う医療技術の人材育成を開始 | 3.24 (火) | 日経 (朝刊) |
| 30 飛躍できるか 大学発 VB 70：NU エコ・エンジニアリング プラズマ診断技術を核とする名古屋大学発ベンチャー | 3.24 (火) | 日刊工業 |
| 31 広角：②地方創出 トヨタ自動車株式会社会長内山田竹志氏本学卒業生 | 3.24 (火) | 日刊工業 |
| 32 医療という国際貢献Ⅲ：後藤秀実医学系研究科教授 | 3.24 (火) | 中日 (朝刊) |
| 33 吉川大弘工学研究科准教授などの研究グループは自閉症スペクトラム障がい児童の教育を支援する被ケアロボットを開発するため、実験を開始 | 3.25 (水) 4. 3 (金) | 読売 他3社 中日 (朝刊) |
| 34 最先端 挑む名大 ノーベル賞続々 野依良治本学特別教授、小林 誠同特別教授、益川敏英同特別教授、下村 脩同特別教授、赤崎 勇同特別教授、天野 浩工学研究科教授の歴代ノーベル賞受賞者が取り上げられる | 3.25 (水) | 読売 |

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成27年3月16日～4月15日]

| 記事 | 月日 | 新聞等名 |
|--|----------------------|--------------------------------------|
| 35 レーザー：赤崎 勇本学特別教授が窒化ガリウムに目をつけた理由を「タフさにほれた」と語る | 3.25 (水) | 日刊工業 |
| 36 本学で私立名古屋中学校の3年生が3日間英語漬けの協働学習に取り組んだ | 3.25 (水) | 中日 (朝刊) |
| 37 数理ウェブ：28日 伊師英之多元数理科学研究科准教授が「組合せ問題と巨大数」と題して講演 | 3.25 (水) | 中日 (朝刊) |
| 38 広角：㊦これからの日本 トヨタ自動車株式会社社長内山田竹志氏本学卒業生 | 3.25 (水) | 日刊工業 |
| 39 政府は日本原子力研究開発機構の理事長に三菱重工元副社長児玉敏雄氏本学卒業生を充てる人事を決めた | 3.25 (水) | 読売 |
| 40 Viva 地球：写真でふりかえる 愛・地球博 エコノミスト内田俊宏氏本学経済学修士 | 3.25 (水) | 中日 (朝刊) |
| 41 本学で平成26年度卒業式が行われ、濱口総長が赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授などの功績や言葉を引き合いに「不屈、貢献、挑戦。この言葉を覚えておいて下さい」と語る | 3.25 (水) 3.26 (木) | 中日 (夕刊) 毎日 (夕刊) 読売 朝日 (朝刊) |
| 42 本学と企業8社などは自動運転技術の公道実証実験を名古屋市守山区で行っている | 3.25 (水) 4. 2 (木) | 中部経済新聞 中日 (朝刊) |
| 43 濱口総長が6年間の任期終了を前に在任中の取り組みや、やり残した課題について語る | 3.26 (木) | 中日 (朝刊) |
| 44 経済学研究科附属国際経済政策研究センターとキタン会共催 名古屋ビジネスセミナー開催：4月14日 弁護士・経済評論家志賀 櫻氏が「タックス・イーターを暴く！」をテーマに講演 | 3.26 (木) | 読売 |
| 45 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授の青色LEDの開発について豊田合成株式会社顧問太田光一氏が窒化ガリウムを使うことは「誰も予期していなかった発明」と語る | 3.27 (金) | 日経 (朝刊) |
| 46 御嶽山 噴火から6ヶ月 山岡耕春環境学研究科教授は現在の御嶽山について「新たな噴火活動の兆候はみられない。今は小康状態」と語る | 3.27 (金) | 読売 |
| 47 学ぶ磨く 中日文化センター訪問：杉山 直理学研究科教授 | 3.27 (金) | 中日 (朝刊) |
| 48 朝日カルチャーセンター2015春学期新講座特集：「画像学入門 結婚の秘儀をめぐる奇跡」鈴木繁夫国際言語文化研究科教授、「宇宙の知りたいこと教えます」杉山 直理学研究科教授、「ハイデッカー『存在と時間』を読む」宮原 勇文学研究科教授 | 3.27 (金) | 朝日 (朝刊) |
| 49 著作権を考える 「死蔵」より公有化へ 長すぎる保護は文化萎縮 日比嘉高文学研究科准教授 | 3.27 (金) | 中日 (夕刊) |
| 50 コラム「経済観測」：新執筆者 木曜日 丹羽宇一郎本学名誉博士 | 3.28 (土) | 毎日 (朝刊) |
| 51 濱口総長が退任あいさつのため中日新聞社を訪れ「企業と研究者が一つ屋根の下で、文化の違いを擦り合わせながら、社会の役にも立つものを開発するような新たな産学連携の拠点整備を4月以降進めると松尾清一次期総長へと引き継ぐ課題を語る | 3.29 (日) | 中日 (朝刊) |
| 52 インタビュールーム：愛知教育大学の学長就任1年を迎える後藤ひとみさん本学医学系研究科博士号取得 | 3.30 (月) | 毎日 (朝刊) |
| 53 濱口総長は退任式で「知恵を絞って名古屋大学でしかできない仕事や教育を切り開くことで、これからの厳しい時代でも強力な大学として存続してほしい」と語る | 3.31 (火) | 読売 中日 (朝刊) |
| 54 いまドキッ！大学生：ノーベル賞生む学風継ぐ 松尾清一次期総長 | 3.31 (火) | 中日 (朝刊) |
| 55 貝淵弘三医学系研究科教授と坪井大輔同特任助教のグループは統合失調症の発症に関係するとされてきた遺伝子「DISC 1」の神経細胞における働きを解明 | 3.31 (火) | 中日 (朝刊) |
| 56 再生医療 普及への道→中 細胞移植 より安全に 異常な細胞を選別する主な技術で、本学と株式会社ニコンによる培養細胞の状態を見分けるソフトが取り上げられる | 3.31 (火) | 日経 (朝刊) |
| 57 げんさいカフェ「兵庫県南部地震から20年：地震の長期評価に教訓は活かされているか？」開催：4月10日 減災館減災ギャラリーにて行われる | 3.31 (火) | 中日 (朝刊) |
| 58 天野 浩工学研究科教授が豊田合成株式会社の本社を訪ねノーベル賞メダルのレプリカを寄贈 | 4. 1 (水) | 日経 (朝刊) 中日 (朝刊) |
| 59 論点スペシャル：外科医の技量とは 安全意識 技術支える 長尾能雅医学部附属病院教授 | 4. 1 (水) | 読売 |
| 60 中日文化センター 50周年記念特別対談 益川敏英本学特別教授と杉山 直理学研究科教授が対談 | 4. 1 (水) 4.15 (水) | 中日 (夕刊) 中日 (朝刊) |
| 61 医学生、オペラで活躍 西影星二さん医学部6年生が医学とオペラ歌手両立の道を諦めず、舞台上に立ち続ける様子が取り上げられる | 4. 1 (水) 4.15 (水) | 朝日 (夕刊) 中日 (朝刊) |
| 62 松尾総長が就任式で「任期中に世界でも屈指の大学に成長させる」と語る | 4. 1 (水) 4. 2 (木) | 朝日 (夕刊) 中日 (夕刊) 日経 (朝刊) 他2社 |
| 63 生きものたちの時間①：体内時計の不思議 吉村 崇トランスフォーマティブ生命分子研究所教授 | 4. 2 (木) | 中日 (朝刊) |
| 64 本学留学生会は11日に留学生向けに開くバザーで販売する品物の提供を求めている | 4. 3 (金) | 中日 (朝刊) |
| 65 病院の実力～愛知編87：耳・鼻・のどの手術 医学部附属病院の治療実績が取り上げられる | 4. 5 (日) | 読売 |
| 66 本学で入学式が行われ松尾総長が「これからは自分を鍛えて大きくする絶好のチャンス。勇気と希望を持って前に進み、個性や能力を思う存分伸ばしてほしい」と語る | 4. 6 (月) | 中日 (朝刊) 他2社 |
| 67 内田 良教育発達科学研究科准教授は運動会などで行われる人間ピラミッドについて『『組み体操は危険だ』『安全だ』とただ言うのではなく、事故が起きた状況を検証し、情報を共有することが必要です』と語る | 4. 6 (月) | 朝日 (朝刊) |

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成27年3月16日～4月15日]

| 記事 | 月日 | 新聞等名 |
|---|----------|----------------|
| 68 備える3.11から 災前の策 第114回想定シリーズ⑬帰宅困難：野中俊宏減災連携研究センター寄附研究部門助教 会社は3日分の備蓄を | 4. 6 (月) | 中日 (朝刊) |
| 69 天野 浩工学研究科教授が浜松科学館名誉館長に就任 | 4. 6 (月) | 静岡新聞 (夕刊) |
| | 4. 7 (火) | 中日 (夕刊) |
| | | 静岡新聞 (朝刊) |
| | 4.12 (日) | 中日 (朝刊) |
| 70 松尾総長が CBC ラジオの番組審議会委員長に再任された | 4. 7 (火) | 中日 (朝刊) |
| 71 春の園遊会招待者：赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授、森 重文本学特別教授 | 4. 7 (火) | 中日 (朝刊) 他2社 |
| 72 芦刈基生生物機能開発利用研究センター教授の遺伝子技術を活用し途上国の食料問題に挑む研究が、東京書籍の中学校1年の理科の教科書に取り上げられた | 4. 7 (火) | 中日 (朝刊) |
| 73 スガウエザリング技術振興財団第34回研究助成：廣畑幹人工学研究科助教「鋼製橋梁の現場補修施工における防食塗装の性能評価」 | 4. 7 (火) | 日刊工業 |
| 74 天野 浩工学研究科教授が科学技術分野の文部科学大臣表彰に選ばれた | 4. 8 (水) | 中日 (朝刊) |
| 75 本学と日立造船株式会社、京都大学が開発した「フラップゲート式防潮堤」の小型模型による実験を公開し水谷法美工学研究科教授は「沿岸域を守る設備は高くならざるを得ないが、景観が失われ、住民からは海が見えなくなって不安との声もある。なるべく低くし、津波や高潮を防ぐ望ましい形だ」と語る | 4. 8 (水) | 中日 (朝刊) 読売 |
| 76 本学で昨年3月に行われた公開シンポジウム「文学部の逆襲」(企画・塩村 耕文学研究科教授)の報告書がブックレットとして出版された | 4. 8 (水) | 朝日 (朝刊) |
| 77 中嶋哲彦教育発達科学研究科教授は大阪府教育委員会が全国学力・学習状況調査の結果を、公立高校入試の可否判定に用いられる中学3年の内心点の基準づくりに活用する方針を固めたことについて「大阪府教委の方針は全国学力テストの趣旨に反する」と語る | 4. 8 (水) | 毎日 (朝刊) |
| 78 素粒子宇宙起源研究機構講演会「明らかとなる素粒子の世界ー3人のノーベル物理学賞受賞者が語るー」開催：8日 益川敏英本学特別教授は「ヒッグス粒子など、1つのものが現れると、その関連の粒子も立て続けに発見される。にぎやかになるのを期待する」と語り、小林 誠同特別教授は「素粒子の『標準モデル』の先に何かがあるのが、見えてくるのではないか」と語る | 4. 9 (木) | 中日 (朝刊) |
| 79 名古屋哲学セミナー第39回春の学習講演会「科学の今を考える」開催：11日 池内 了本学名誉教授が講演 | 4. 9 (木) | 読売 |
| | 4.14 (火) | 毎日 (朝刊) |
| 80 森 英樹本学名誉教授は国立大学の入学式や卒業式での国旗掲揚や国家斉唱の要請について「憲法の保障する『学問の自由』を実現する大原則が「大学の自治」であり、学内の運営にかかわることはあまねく大学が自主的に決めるのが筋だ」と語る | 4.10 (金) | 朝日 (朝刊) |
| 81 朝日カルチャーセンター2015春学期講座特集：金剛般若経を読む 谷口富士夫本学非常勤講師 | 4.10 (金) | 朝日 (朝刊) |
| 82 中部発 よこそ天野先輩 天野 浩工学研究科教授が母校の浜松市立広沢小学校と蛸塚中学校をノーベル賞受賞後初めて訪問 | 4.10 (金) | 中日 (夕刊) |
| 83 女性研究者つなぐ 愛知の輪：東村副理事・生命農学研究科教授は「多様な働き方ができる社会になれば、働き過ぎの男性にとっても、幸せな社会になると思う」と語る | 4.11 (土) | 朝日 (朝刊) |
| 84 科学の扉：噴火を追い 監視網は道半ば 御嶽山は気象庁の地震計に加え、本学の地震計も使って活動を分析したことが取り上げられる | 4.12 (日) | 朝日 (朝刊) |
| 85 夏目敦至医学系研究科准教授などと京都大学の研究グループは悪性脳腫瘍の一種である低悪性度神経膠腫の遺伝子異常を解明 | 4.14 (火) | 中日 (朝刊) 他3社 |
| 86 澤田 誠環境医学研究科教授などはミクログリア細胞が血液脳関門にある錠前を開けて通り道を作り内部に入り込むことに注目し、錠前の鍵の役割を果たすタンパク質の遺伝子を特定 | 4.14 (火) | 日経 (朝刊) |
| 87 ひと・仕事：「生きものたちの時間」を連載する 吉村 崇トランスフォーマティブ生命分子研究所教授 | 4.14 (火) | 中日 (朝刊) |
| 88 長尾能雅医学部附属病院教授は神戸国際フロンティアメディカルセンターで移植手術を受けた国内外の患者7人のうち4人が手術後1ヶ月以内に死亡していることについて「放置しては、日本の医療の信頼性を損なう恐れもある」と語る | 4.14 (火) | 読売 |
| 89 第109回防災アカデミー開催：21日「建築構造の安全を考える」をテーマに東京工業大学特任教授金箱温春氏が講演 | 4.14 (火) | 中日 (朝刊) |
| 90 レーザー：益川節、健在ナリ 益川敏英本学特別教授が「科学は肯定のための否定の作業を重ねて真理にたどりつく」と語る | 4.15 (水) | 日刊工業 |
| 91 山岡耕春環境学研究科教授が東海テレビ放送番組審議会委員に選出された | 4.15 (水) | 中日 (朝刊) |
| 92 時のおもり：ドローンという怪物 池内 了本学名誉教授 | 4.15 (水) | 中日 (朝刊) |
| 93 天野 浩工学研究科教授が文部科学省より文部科学大臣表彰を授与された | 4.15 (水) | 中日 (夕刊) |

第56回名大祭を6月4日(木)～6月7日(日)に開催

第56回名大祭が、6月4日(木)～7日(日)に東山キャンパスで行われます。

今年のテーマは「邂逅」です。

さまざまな企画を用意して、皆様のご来場をお待ちしております。

開催日程：6月4日(木)～7日(日)

会場：名古屋大学東山キャンパス

最寄駅：市営地下鉄名城線名古屋大学駅

(ご来場の際は公共交通機関をご利用ください)

●環境対策の取り組み

第56回名大祭では、環境保護への取り組みとしてごみの分別を徹底して行っています。また、模擬店での使用済みの油や割り箸、家庭内や学内で出るペットボトルキャップを回収して、リサイクルを行っています。油は塗料に、割り箸は再生紙にリサイクルしています。またペットボトルキャップは回収しリサイクルされ、得た収益でワクチンが購入されています。皆様ご協力お願い致します。

●第56回名大祭における食品の取扱いについて

第56回名大祭におきましても、前回までの模擬店衛生管理体制を見直し、改善を行い、さらなる万全な模擬店運営システムの確立に名大祭本部実行委員会一同努めております。

皆様に安心して名大祭を楽しんでいただけるよう、千種保健所のご指導の下、模擬店運営を行ってまいりますので、ご理解の程よろしくお願い致します。

●バリアフリーへの取り組み

第56回名大祭では、障がい者、子ども連れの方、妊婦、外国の方を含むすべての来場者の方々に名大祭を楽しんでもらえるように様々な取り組みを行っています。

多目的トイレや障害となる坂道などの場所を記したバリアフリーマップ、外国の方に役立つ英語マップを作成しています。また、各企画会場での優先席の設置の促進、案内所で車いす貸出しを行っています。

お問い合わせ

名古屋大学学生会館第7集会室

名大祭本部実行委員会

TEL/FAX 052-789-5178

E-mail mail@meidaisai.com

URL <http://meidaisai.com>



●講演会企画

「私のカレーなる人生～あなたの日常にスパイスを～」

天涯孤独の生い立ちから、東証一部上場企業、国内最大手の1,200店舗超のカレーチェーンをゼロから創った宗次徳二氏をお招きし、その生き様についての講演会をしていただきます。この講演会でここ一番の学びをお届けします。皆様のご来場をお待ちしております。

講師：カレーチェーン店創業者 宗次徳二氏

日時：6月6日(土)15:00～17:00

場所：IB電子情報館 中棟2階 IB大講義室

※現在、事前応募受付中です。詳細は名大祭本部実行委員会までお問い合わせください。

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

2月13日(金)～5月29日(金)

場 所：附属図書館医学部分館
2階入口ホール

時 間：9:00～20:00(平日)、
13:00～17:00(土曜日)

休 館 日：日・祝日

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

附属図書館医学部分館 052-744-2505

附属図書館医学部分館ミニ展示会

「建物に見る病院と医学校の歴史」

内 容：広く日本と西洋における病院と医学校の歴史を建物から振り返り、絵画、図面、写真等、医学部史料室に所蔵する史料を展示公開する



5月19日(火)

場 所：ES 総合館1階ES ホール

時 間：13:00～17:00

定 員：200名

対 象：ウェルビーイングプログラム
履修生、学内外学生、一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

国際開発研究科

特任助教 荻巣崇世 052-789-4573

名古屋大学国際シンポジウム

「アジアにおける女性のリーダーシップの推進」

講 演 者：イザベル・ゲレロ氏 (マサチューセッツ工科大学上席講師)、他
内 容：日本やアジアで女性のリーダーシップを推進するための課題や有効な方策について (使用言語は英語で同時通訳あり)



5月21日(木)

場 所：減災館1階減災ホール

時 間：18:00～19:30

定 員：100名

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

第110回防災アカデミー

講演題目：「東海地方が抱える気象災害リスクとその減災対応」

講 演 者：田代 喬 (減災連携研究センター寄附研究部門准教授)



5月23日(土)

場 所：豊田講堂

時 間：10:00～15:30

定 員：700名

対 象：学内関係者、一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

心の発達支援研究実践センター
052-789-2658

心の発達支援研究実践センター改組記念行事

「心の発達とつながりよりよく生きる」

テ ー マ：「心の発達とメンタルヘルス」、「ともに歩む・ともに支える」
ー発達障害児支援研究プロジェクトからー

講演題目：「特別支援教育の現状と課題」

講 演 者：井上恵嗣氏 (文部科学省初等中等教育局特別支援教育課長)

講演題目：「モンゴルの伝統教育と特別支援教育」

講 演 者：D. Odgerel 氏 (モンゴル国立教育大学講師)

講演題目：「発達早期からの理解と支援」

ープロジェクトの活動から見えてきたことー

講 演 者：野邑健二 (心の発達支援研究実践センター特任准教授)

講演題目：「発達障害に関わる教職員における理解の促進」

講 演 者：酒井貴庸 (教育発達科学研究科特任助教)

内 容：シンポジウム、講演



5月23日(土)、6月13日(土)、
6月27日(土)、7月11日(土)

場 所：理農館3階335号室

時 間：10:00～15:00

対 象：博士課程学生、ポスドク

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部

ビジネス人材育成センター 052-747-6490

ビジネス人材育成センター

平成27年度前期 B 人セミナー

テ ー マ：「留学の HOW TO / 博士取得後の進路ー海外ポスドクー、

「弁理士業務の実際と将来求められる人物像」(5/23)

「ベンチャー企業研究の方法と求められる『人材』(上場バイオ企業を中心に)、

「キャリアシードーあなたは働くことに何を求めていますかー」(6/13)

「博士の就活スタート・リスタートー社会からの評価と自己評価・私らしい未来を

獲得するためにー、「医療機器業界の現状とこれから」(6/27)

「ファイナンシャルプランについてーライフプランに即した資金計画ー、

「外資系企業とは? メディカルリエゾンとは?」(7/11)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

5月25日(月)、26日(火)

場 所：豊田講堂

時 間：12:40~14:10 (5/25)、
9:00~18:05 (5/26)

定 員：600名

対 象：学生、研究員、教員、
企業関係者、他

参加費：無料

第3回 ITbM 国際シンポジウム

The 3rd International Symposium on Transformative Bio-Molecules (ISTbM-3)

講演者：クリストファー・チャン氏(カリフォルニア大学バークレー校教授)、
グレゴリー・ヴォス氏(シカゴ大学教授)、
阿部 洋(理学研究科教授)、藤田 誠氏(東京大学教授)、
ショーン・カトラー氏(カリフォルニア大学リバーサイド校准教授)、
フローレンス・タマ(理学研究科教授)、
ヴォルフ・フロマー氏(カーネギー研究所主任研究者)、
松林嘉克(理学研究科教授)、藤吉好則(創薬科学研究科特任教授)、他

内 容：世界で活躍する有機合成化学者、動植物生物学者が最先端の研究成果を講演する



[第11回平田アワード] (5/25)

時 間：14:20~16:10

講演者：アシュラフ・ブリック氏(テクニオンーイスラエル工科大学教授)

内 容：化学全合成したタンパク質を用い、構造と機能を分子レベルで解き明かす Protein Chemistry の世界的リーダーが最先端の研究成果を講演する

[第1回岡崎アワード] (5/25)

時 間：16:25~18:00

講演者：フェン・チャン氏(ブロード研究所主任研究員)

内 容：ゲノム編集として知られる CRISPR/CAS-9システムについて講演する

[問い合わせ先]

トランスフォーマティブ生命分子研究所
特任講師 佐藤綾人 052-747-6856

5月26日(火)~8月29日(土) 9月26日(土)

※展示期間を1ヶ月延長します

場 所：博物館2階展示室

時 間：10:00~16:00

休 館 日：日・月曜日、8月13日~15日
(6月7日臨時開館)

入 場 料：無料

第21回博物館特別展「関戸弥太郎と宇宙線望遠鏡」

[関連特別講演会]

場 所：博物館3階講義室

時 間：13:30~15:00

講演題目：「宇宙線の風をさぐる」(6/7)

講演者：宗像一起氏(信州大学教授)

講演題目：「チェレンコフ望遠鏡で探る宇宙線のふるさと」(8/1)

講演者：田島宏康(太陽地球環境研究所教授)

参加費：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



5月30日(土)

場 所：博物館2階展示室

時 間：14:00~15:00

参加費：無料

博物館コンサート NUMCo「宇宙からのメッセージ ーフルート、キーボードのアンサンブルー」

演奏曲目：「EARTH」、「星のセレナード」、「月の光」、他

出 演：杉浦 隆氏(フルート)、木須康一氏(キーボード)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



名大トピックス No.264 平成27年5月15日発行

編集・発行/名古屋大学総務部広報渉外課

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町(〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

表紙

東海学生アーチェリー王座
出場校決定戦(アーチェ
リー部)
(平成27年4月19日)



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>)でもご覧いただけます。

157 名古屋大学と空襲③ — 東山キャンパス —

すでに名古屋帝国大学の敷地となっていた現在の東山キャンパスが、アメリカ軍による本格的な空爆を受けたのは、最も大規模な名古屋空襲のあった1945(昭和20)年5月14日のことです。名帝大はこの空襲によって、大学本部の多くと理学部、航空医学研究所の一部などを焼失、澁澤元治総長が「緑の学園」構想の下に鏡ヶ池付近につくった植樹林も焼けてしまいました。

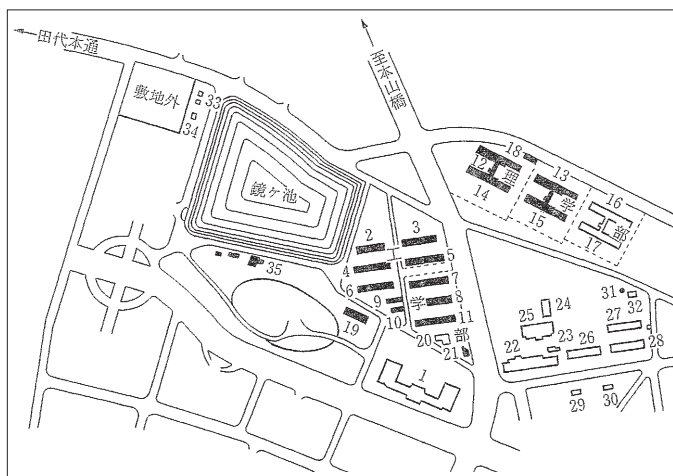
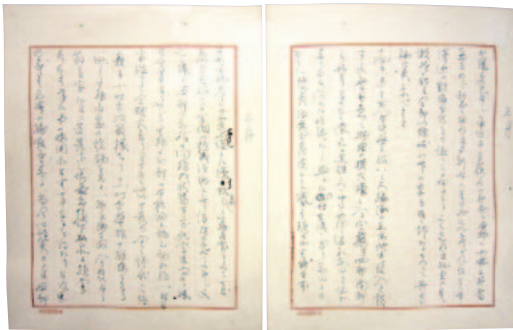
ただ、この東山への空襲は、すでに研究施設の疎開がおおむね完了していたことや、建物の被害も鶴舞に比べれば少なかったこともあってか、史料が少なくあまり実態が分かっていません。そのような中、あまり知られていませんが、当時の理学部長であった柴田雄次教授の日記は、その様子を伝える数少ない一次史料です。

空襲当日の柴田日記によると、午前8時頃に東海地区に敵機の大編隊が侵入したことを報じる空襲警報が出たため、柴田教授は支度をして物理学教室の横の防空壕に入り

ました。名古屋の西部と南部からはじまった空襲により、まもなく「濛々たる黒煙」が空高くに達し、それが西風によって東山に流れて来て、日中にもかかわらずあたりが暗くなりました。

そして午前8時半頃から、東山にもしきりに焼夷弾が投下され、危険で防空壕から顔を出すこともできないほどでした。生物学教室が危ないという声が上がったので顔を出してそちらを見ると、教室の屋根で20余りの焼夷弾が燃えていましたが、もはや消火の方法はありませんでした。やがて生物学教室も本部も本格的に燃えはじめ、約1時間半にして全館に燃え広がって焼け落ちました。柴田教授は「全く惨状言語に絶す。」と書いています。

午前10時半頃には敵機が去り、11時半に警報も解除されました。この空襲による火事により、電気、ガス、水道が止まってしまい、柴田教授は「教室生活は憂鬱となる。」と書いています。



| | | |
|---|---|---|
| 1 | 2 | 3 |
| 4 | | |

- 1 柴田雄次日記(1945年5月14日、柴田純子氏所蔵)。柴田は無機化学の大家で、日本学士院賞恩賜賞受賞、文化功労者。東京都立大学初代総長、日本学士院長も歴任している。
- 2 空襲により炎上する理学部生物学教室。当時の名帝大の校舎は戦時下の物資不足で木造建築にせざるをえず、火災に弱かった。写っている人物は名帝大の学生。
- 3 1943年頃の写真。手前はこれから建てる生物学教室の土台。上の方に写っているのも理学部校舎で、現在のエコトピア科学研究所先端技術共同研究施設および工学部9号館の位置にあたる。
- 4 名帝大東山地区の建物配置図(1943年5月1日当時)。白いものは計画中か建設中のもの。26が生物学教室で、位置は現在のES総合館のあたりと思われる。被災した航空医学研究所の建物は19。